
幼馴染みは勇者と魔王の娘。

DIOrennji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染みは勇者と魔王の娘。

【Nコード】

N6903X

【作者名】

DIOrennji

【あらすじ】

従来の日本を含め、世界は各地で紛争を起こしつつもどこか安定していた。だが、とある事情を筆頭に第三次世界大戦は勃発しかけてしまう。そんな世界滅亡を賭けた戦いを止めた

のは、日本でもアメリカでも中国でもロシアでもなく『魔王』と『勇者』だった。未然に防がれた大戦から数年後に、魔王と勇者によって建てられた世界唯一の『魔法学校』。

主人公こと新崎真人は魔法学校に在校する高等部一年。眼が凄まじく良い以外は至って普通なのだが、彼の幼馴染みである少女は勇者

と魔王の一人娘という、全くもって普通ではない『幼馴染み』だっ
た！

作者が自由に書いているので若干カオス要素と微弱のグロを含み
ます。日曜を目処に更新していきますが、別の日に投稿した上で日
曜でも更新するかもしれません。

- Prologue「変わらぬ始業式」 -

「魔王」

それはどの世界や話題や論理から倫理まで。…最後の二つはよく分からないが。そんなどうでもいい話は置いておいて、まあ。あれだ。大体悪い奴だったりする。

子供の頃の俺は『魔王を倒すんだ！』と夢を見ていた節もあるし、大方の人達だつて子供の頃は形は違えど、『悪い敵を倒そう！』という夢を持っていただろう。

その夢が現実になりえない。という事は大きくなるにつれ少しずつ分かっていく。それは大人になれてるのか純粋な心が消えていつてるのか。なんて難しい話でもない。

ただ、俺は…。特殊な、というか。異例すぎる夢の壊れ方をした。…。ああ、ショックだったね。まさか壊れるまでの期間が。

『三秒』

そう、「三秒」だったとは思いつかなかった。というか早すぎないか？今思い返しても早すぎる。

カップラーメンが出来るのですら「三分」かかるというのに、俺の夢が壊れる速度なんて「三秒」だった。カップラーメンよりも早いのか。

まばたき数回程度で夢を破壊されたのかと思うと、溜息が今でも出そうになるな。

そんな折。

パチパチパチンパチパチンパチ！！

絶対誰かがわざと強く叩いている。という拍手音が俺の意識を現実へと引き戻した。

一瞬だけ不快な気持ちになりかけたが、直ぐに俺はどこでどういう状況にいるのかを思い出す。

そうだった。今日は『入学式』だったな。

この学校に新しく入学してくる『新入生』を迎える大切な式。

長い教頭の話の半ば意識をどこかに飛ばしながら、聞いていたので忘れていた。

辺りを見渡してみれば、周りには俺と同じ制服姿の同級生が列を成らして立っている。そして皆一様に拍手を成らしている中、とある人物が壇上へと上がっていった。

…とある人とは、先程の俺の最短夢破壊記録保持者だ。

短い黒髪に整った顔立ちだが、顎^{あご}から少しだけ生えているヒゲが何ともオヤジらしさを引き立てており。

イケメンというよりは、ダンディという言葉が似合いそうな印象を受ける。

すとん。すとん。とやけに歩きたびに音が鳴るその人の足取りが止まると同時に、顎にちょこちょこ生えているヒゲが似合う相応の雰囲気を出しながら。

専用の机に置かれたマイクを何故かわざわざ手に取り、その人は喋り始めた。

「まず最初に」

こほん。と咳払いをした後に。

「本校に入学した新入生、おめでとう」

成人男性の特徴ある太く低い音。毅然^{きげん}とした態度からは、規律正しく礼儀の良さが伺える^{うかが}ように見えなくも無い。

「俺がここの校長をやっている魔王だ！」

さらりと当然のごとく。

隠し事なんてありませんよ。と堂々としながら印象第一位になる言葉を言ったと同時に、先程まで俺の後ろから聞こえていた新入生達の雑音が消える。

まあ…当然だろう。

うろたえる新入生達を見て、突如『魔王』はニヤリと下品な笑みを浮かべ鼻の下を伸ばした。

そろそろだな。

俺は咄嗟に左右の耳穴を、両手の人差し指で捻じ込むように塞ぐ。同時に、校長である『魔王』は続きの言葉を言った。

「そして、俺と寝たい奴はいつでも受け付け」

だが、最後まで続かなかった。

魔王が立っている壇上の端にある垂れ幕^{たれまく}から、突如として小規模の雷のような電撃が魔王に炸裂したからだ。

かなりの広さを誇っているはずの体育館に、ドジャボオギヤアアンンンンン。という空気さえ裂いているかのような轟音^{ごうおん}が響く。

そして、一呼吸置いて俺の後ろから様々な感情が入り混じった悲鳴

が上がった。

対して俺を含め周りにいる人達は轟音に身を竦^{すく}ませはしたものの、直ぐに元の状態へと戻る。

正直な所、皆が皆この出来事に慣れていた。まるで恒例行事のように入学式に限らず学期ごとに起こっていたらそりゃそうなるだろう。

「ジョークだジョーク、そう怒るな。真面目にやるから」

あれだけの電撃らしき攻撃を喰らっておきながら、モクモクと立ち上る煙から平気な顔をして姿を現す魔王。

絶対に心の底から言っていたな、さっきの。俺を含め心の中では皆同じ事を思っただろう。

そんな生徒達の心に目を向けず、魔王は続けていった。

「ここからは現高等部生徒会長に代わりたいと思う」

鼻の下を伸ばしていた『スケベオヤジ』状態と打って変わって、魔王は急に真面目になる。

魔王がマイクの置いてある台から一礼して離れると。すれ違つように、黒と黄が混ざった長髪の少女が垂れ幕から出て来た。

少女はこの学校専用の青と黄色の制服を、皺^{しわ}や染み一つなく着こなしている。

あいつの性格を考えると当たり前だな…。

俺は欠伸をしながら、生まれた時からの付き合いである少女を見つめた。丁度マイクに口を近づけている最中だったらしく、すぐに声が聞こえてきた。

「初めましての方は初めまして」

清く透き通った声。いつ聞いても心地が良くなるそんな声。小さい頃からよく聞いていた。

「現高等部生徒会長を務めさせている、あなぐらゆしま朝倉勇魔です」

勇魔と名乗った少女は喋っている途中で、黄と黒の髪を空へ晒しながら垂れ幕の方へと顔を向ける。

ぼそぼそ、と少しばかり口を動かすと。再び俺達のいる正面へと顔を向けて、区切っていた言葉を紡ぎだした。

「先程喋っていた『魔王』の娘です」

後方が、ざわつき始める。が。

勇魔は一息付きながら、片方が黒でもう片方が黄の瞳を少しばかり閉じたら。

自然と。ざわめきは黙った。

沈黙を打ち破るかのように、勇魔は目を見開く。

そして、締めくくりであり最終的であり始まりの言葉を。呟いた。

「新入生の皆さん。ようこそ。魔法学校へ」

・ Episode : 1 「フレンドリー」 ・

新たな学生を迎えた入学式を終え、俺はゆっくりとした足取りで教室に向かっていたのだが。

「新崎ー！ ちょっと待ってくれー！」

俺の名前と共に、聞き覚えのある声と駆けるような足音が聞こえてくる。後ろを振り向いてみれば、こちらに右手を振りながら走ってくる青年が一人いた。

特に今現在用事はなく、かといって急ぐような時間でもないのが俺はその場で立ち止まる。

ぜえ、はあ。ぜえ… はあああ。と息を荒げ、ようやく数秒経って追いついた青年。

青年は学校指定の制服を着崩しており、中からは違反色である赤色のシャツが一切隠すことなく見えている。

髪はライオンの鬚たてがみのような茶色に染めて、綺麗に固めていた。これらの青年の容姿からは少しばかりヤンチャをしているのだろうという印象を受けるだろう。

実際そうなのだから困る。ヤンキーが実は優しかったという伏線とつかギャップという物を期待したいが、そんな事は断じてない。

「…それで、気丈。どうした？」

俺の目の前に見える青年こと、気丈きじょう徹は昔からの付き合いであり親友だ。

こいつは良く漫画やアニメやゲームなどといった、娯楽に関する物に出てくる『エロキャラ』を模範にしたような奴で。

女であれば手をなりふりかけずかけるといふ、ある種では最低な部類に入る性格をしている。

けれど、それ以上に良い所はあったり……。しないな。利点はあるが良い所はないな。

利点というのは、やたらとイケメンだったりする所ぐらいだろう。キャラで損してそうだ。

「…何かすつげえ失礼な事を考えてないか？新崎」

先程まで前かがみで息切れを起こしていたはずの気丈は、いつの間にかこちらを見ながら顔を少し顰^{しか}めていた。

「いや、特に」

「ならいいけどよ。ところで、俺は一組だけど新崎って何組だっけ？」

「二組です！」

俺が答えるよりも先に、さらりと聞き覚えのある可愛らしい声が割り込む。

ちらりと、声の聞こえた方へと顔を向けてみれば。ここの女子生徒の制服を着た少女が二人の中間に立っていた。

黄色の髪を束ねたツインテール。そして真っ赤なりボンが髪の出所を結んでいる。顔はどこかまだ幼さが残っており、少女と女性の間辺りを見ているかのようだ。

少女は、にこりと周りを明るくするような笑顔を零^{こぼ}した後に呟く。

「…お久しぶりですね、気丈さん！」

少女に話しかけられた途端。女の子との接し方は慣れているはずの気丈は硬直して。

「ちょっと俺用事思い出したから帰」

少女はこの場から立ち去ろうとした気丈の腕を、すぐさま片手で掴み取り。

「駄目ですよー。話はまだ終わってないですから。ね…?」

最後の部分をやたらと強調しながら、びくびくと怯える気丈を逃がられないようにした。

気丈…。千載一遇せんざいいちぐうのタイミングを…。

「兄さん達もこれから教室でホームルーム？」

少女は無垢な瞳をこちらに向けながら、俺の事を『兄さん』と呼ぶ。よく似てないなどと言われるが、実はこの少女は俺の妹だ。名前はにいちゃん新崎桜。

礼儀正しく、性格も良く、頭も良く、運動も出来、まるで俺が駄目な所を全て持っているかのようなハイスペックすぎる妹。

独特な黄色のツインテールと、体から顔つきまで美少女すぎる性能も極まってかとにかくモテまくる。

そして唯一俺の知っている中では常識人だったりもする。

「多分な、実際に教室に行ってみないと分からない」

俺が適当に答えると桜は「そうなんだ」とだけ呟いて、今度は気丈の方へと顔を向けた。

「そういえば、気丈さん」

「な、何？」

「さっき話してた下級生の子、可愛らしかったですね」

桜の満面の笑みを受けている気丈は、だらだらだらだらだら。と効果音が聞こえそうな程に大量の冷や汗を流す。

だが気丈は何とか内から出る恐怖を抑えつつ、「あはは…」と無理に引きつった笑いをしながら返答した。

伊達にはぼ全ての女性を愛している宣言をしただけあるな…。お陰で首を絞めてるが…。

「ふふふ。気丈さん。あまりヤン」

妹が喋っている最中。ガシャガシャンンンツ。と大量な何かが床に落ちた音が響く。

俺と気丈は音に驚いて床を見れば、カバーがかかっている包丁が大量に落ちていた。

ざっと十二本ほど。

「あ、家庭科用に持ってきた万能包丁が落ちちゃった」

拾い上げる我が妹。ただ兄である俺から言わせて貰うと。その落とした量と所持している理由は、…無理があると思うぞ。

気丈を見れば、小刻みに体を震わせながら恐怖に打ちひしがれていた。

俺は気丈の隣へと行き、肩に手を置きながら耳元で囁く。

「…逃げるなら今のうちしかないぞ」

言葉が脳に直結したのか、気丈は震える体を抑えながら立ち戻り。

「す、すまん桜ちゃん。急用を思い出したからでちょっと行ってくる！！」

人間が出せるのかと思えるほどのダッシュで廊下を駆け逃げる。その後姿を見ながら俺は呟いた。

「…生きて会えるなら会おうな、気丈。」

対して桜はガチャガチャ。と独特の金属音を鳴らし服に包丁をしまいながら喋る。

「兄さん」

「ん？」

「これ」

桜が右手で差し出してきたのは、丁度携帯機に付ける小型のイヤホンの片方。…付けろって事か。

右耳に刺し込んで最初に聞こえてきたのは、軽いノイズと聞き覚えのある声。

『はあ…はあ…。ここまで来ればさすがの桜ちゃんでも撒けただろ…』

気丈…。

クラスが新しくなろうが、十年近くこの学校にいれば知り合いがないという事はあまりない。

そんな訳で、新しいクラスメイトは殆ど変わりが無かったが。変わったクラスメイトはいた。

『途上藍』

名前から既に珍しかった途上藍という名の少女は、最初から目立っていたのを覚えている。

「発展途上の『途上』に藍色の『藍』で…、途上藍って言います…」

少しでもクラスがざわつけば聞き取れないほどの小さな声。あまり外に出ていないのか、一般的な小麦色よりも薄い肌色。

「皆さん…、よろしくお願いします…」

水色の風に流されているかのような髪。小柄な体からは触れれば折れそうな印象さえ受けた。

ホームルームが終われば、担任からは「はははは！ 無理なら無理だとはつきり言えればいい！」と無神経なのか優しいのか分からない言葉を投げかけられ。

クラスメイトからはただでさえ新しい面子という事もある上に、美少女だったという事もあって大人数に質問攻めにされ。

完全に萎縮いしゆくしていたな、あの娘。クラスメイトの奴らもほどほどにすればいいのだが…。それはさておいてだな。

その絶賛有名人状態の途上藍が、学校を出て三十分ほどかかって到着する寮入り口前にて右往左往している。

「……やから、……もしかしたら……」

何か呟いてるのは聞こえるが、彼女との距離があるせいか内容が全部聞き取れない。

しかし、何もなくてあんな所で右往左往する必要はないだろうし。とりあえず話だけでも掛けてみるか。

「何か困った事でもあったのか？」

「えひうつ！？」

俺に話しかけると、途上藍は体を大きく跳ね上げ変な声を出した。

「すまん、そこまで驚くとは思っていなかった」

余程驚いたのか、少しだけ震えている途上藍へと近づいて謝る俺。うつむ。これじゃ俺もクラスメイトとあまり変わりが無い。

「い、いえ。こちらこそすいません」

ウェーブのかかった青色の髪を、大きく上下に揺らしながら謝る途上藍。お陰で女の子特有の臭いが香って来る。何でだろうな。男の臭いなんて死ぬほど嫌だが、女の子の臭いとなると一転して良い臭いになる。

女性フェロモンとかが関係してるだかという話も聞いた事があるが…よく覚えていない。まあいいさ、考えてもどうせ分からんに決まっている。

「…ところで、何で寮の前なんかで立ち往生してるんだ？」

俺が質問すると聞いた事が悪かったのか、途上藍は顔を暗くしながら視線を下へと落とした。…何か言えないような理由があるのか。質問するべきじゃなかったな。

あー。と言いながら何か共通の話題を考えるが、初対面なのに相手の趣味とかが分かるわけがない。やばいなこれ、余計に詰み始めてきてないか？

「…。すいません。理由も言えないなんて」

「いや、謝るのは俺の方だ。途上さんが謝ることじゃない」

「…ほんまにすいません。何か心配を掛けちゃって」

「……え？」

気のせいかな俺には、途上藍が今関西弁を使っているように聞こえたんだが…。

俺の啞然とした声と態度を目の当たりにした途上藍は、首を軽く傾げた後。数秒経って。

「ま、またウチ関西弁なんて使ってしもたああああああ！！」

大きく瞳と口を開けて叫びながら、両手で頭を抱え込んだ。今度は聞き間違いじゃないな…。俺の目の前にいるこの娘は、関西弁をバリバリ喋っている。

「隠すのは下手やけど、こんなに早くバレるなんて。ウチ、ほんまに駄目や…」

いつまでも続く奈落の海のように、深い青色の瞳をうるませながら
呟く途上藍。見ていると可愛い。

「せ、せや！ いい案があるやん！！」

突然嬉しそうな顔をして、涙を空へと払ったと思えば。食い入るよ
うに俺を見る。喜怒哀楽が激しいな。

「お願いや、ウチが関西弁喋るって事をクラスの人に黙っておいて
くれへん！？」

俺の両腕を掴みながら、下から伺^{うかが}うように顔を覗きこんでくる。や
ばい、かなり顔が近い。非常に顔の向け所に困る。

「別にいいが。せめて理由ぐらいは言ってくれないか？」
「り、ゆう？」

俺の言葉に、酷く顔を歪ませ露骨^{ろこつ}に反応を見せる。……これ以上は
地雷の臭いしかない。戦略的撤退を取る事にするか。

「いや、いい。聞かなかった事にしてくれ。悪い」

この場は立ち去った方がいいだろう。俺は彼女に軽く謝りながら、
寮に入る事にした。

「……あ」

後ろから声がしたが、俺は振り向かず寮の中へと入っていく。少
し経った後よくよく考えたら、結局彼女の手助け出来てないな……。

- Episode : 2 「分裂の日」 -

「あらあら。お帰りなさい新崎さん」

いつまでも行き止まりが見えない廊下歩いている時、ふと右のほうから柔らかい声がした。この癒し効果のある声を持っているって事は、あの人か。

「瀬名さんですか」

右へ顔を向けて見ると、扉の向こうで割烹着姿に長く淡いレモン色のような髪を曝け出して。柔らかい笑みをこちらに向けている女性がいる。

扉の上には「104」と書かれたナンバープレートが貼り付けられており、扉には「空室」と達筆に書かれた紙が貼り付けれていた。空室なら入るか。もしこれが女子の部屋とかだったら笑えない事になるから入らないが…。

「はいー。丁度部屋のお手入れの最中です」

待つてくれたのか、単純に反応が遅いのか分からない返事が来る。

このなんともおっとりした喋りをしている女性は『瀬名』さんだ。彼女は、近くに花でも咲いているのかと思えるくらいにほのぼのしている。更にはのんびりとした性格と合わさってか、非常に魔法学校の生徒からは親しまれている。

寮の管理人でよく料理を作っては一緒に夕食を食べさせてくれるからというのも、生徒の信頼をいつのまにか手に入れていた理由の一つかもしれない。

だが、彼女はただの『人』じゃない。美人で料理をよく作ってくれて親身になってくれてスタイルが良くて素晴らしい聖人君子のような人でもだ。

『勇者』

彼女のこちらの俗称であり、敬称であり偶像であり滅多に言われない名前で職業でもある。同時に校長をやってる『魔王』の嫁さんだ。セクハラしまくる旦那さんとは、魔王と勇者という関係も含めて対極のような存在。

そんな世界の手綱を握っていたはずの瀬名さんは、あらあらー？と左手の人差し指を頬に当てながら呟き。

「そういえば、ゆーまちゃんが新崎さんと呼んでいましたよー」

ゆーまとは朝倉勇魔のあだ名だ。そしてあいつに呼ばれるという事は非常に厄介な事に巻き込まれるのだろーな…。うん、逃げたい。しかし殺人的に綺麗な瀬名さんの頼みを無下にするのも気が引けたので、俺は快く居場所を聞くことにした。

「今どこにいると思います？」

「あの娘は…。たぶん、自室にいるはずですよー」

てことは、あいつの部屋にわざわざ自宅訪問しにいかないといけないのかなのか。わーお。

俺は溜息を尽きながら瀬名さんとの別れを惜しみつつ、その場を後にし廊下を再び歩き始める。

…。それにしても、絶対ここは寮ではないな。毎回思うが。

普通の寮ならば部屋は小さく、他の寮生との共有使用が当たり前なのだが。ここは一切として『寮の常識』というのを考えていない。一人一部屋は当たり前として大きな広間一つ、ダイニングキッチン、更には寝室、個室の風呂場までつけておりそれも大きい。どういう事だ…、寮よりも超高級ホテルといったほうがいいんじゃないのか？ とさえ思えるほどに常識に懸け離^{かけはな}れている。一軒家の一階部分が一部屋として機能している。単位とスケールがおかしい。

そんな事を考えていると、「124」ナンバーである勇魔の部屋扉前へと辿り着いた。とりあえずノックぐらいはしておくか。

「どなたですかー？」

「^{まこと}真人だ」

真人というのは俺の下の名前だから、これを言えばすぐ開けてくれると思ったのだが。

「……まっ、真人つつ！！？　ちょ、ちょっと部屋片付けるからまっ」

きやああああああああっつつ！！！！　ドタドタドンドンガン！！　物凄い悲鳴と騒音が、部屋の中から木霊^{こだま}して廊下まで響いてきた。まさか、何かあったのか！？

「勇魔、大丈夫か！？」

俺は思い切りドアノブを回し、急いで部屋の状況を確認しようとした。が、それが悪かった。

「あ」

一声。

視界に映っているのは、リビングのような広い部屋。その床に大量の洗濯物らしき物を、撒き散らしながら倒れている下着姿の少女。少女が身に着けているのは可愛らしい黒と白のコントラストが成されているパンツとブラ。しかも豊満な体付きだから微妙にキツそうにも見えた。

洗濯物が撒き散らされてる所から予想すると、風呂から上がったついでに洗濯物を片付けようとしていたんだろうな。

さて、こんな絶妙なタイミングだが。一つ言おう。

俺は常人を遥かに超越する眼を持っている。具体的に説明するなら、視界に入るもの全てが『スローモーション』に見える程の。

凝視すれば、スローモーションよりも上のストップモーションでもいづべきか。それが出来るのだが…。

つまりは、あれだ。

この少女の下着姿が、仕方が無く。そうだ、不可抗力でも。あれだ。うん。

逃げよう。

急いで廊下までダッシュしようとした直後、誰かが俺の腕を掴んで束縛そくはくしていて逃げられない。

冷や汗を掻きながら後ろを振り返ってみれば、殺意を込めた眼をギラつかせている少女が俺の腕を掴んでいた。

「待ちなさいよ…」

ああ、こういう気分なのか。気丈は。

俺は未だに痛む頬を、効果がないと知りつつも撫でながら歩く。

「ありえない、本当にありえない。女の子の部屋に入る時ぐらいノックぐらいしなさいよ！！」

その隣では両腕を組み仁王像の如き怒りをこちらに向けている少女が一人。黄色と黒の入り混じった髪と瞳を携え、髪は学校指定の制服のスカートまで届いており、すらりとした肢体は指定の制服に包まれている。

俗に『美少女』というカテゴリーに入るこの少女は、俺の『幼馴染』であり勇者と魔王の一人娘である、『朝倉勇魔』だ。

こいつとは幼少の頃から行動を共にし、時には喧嘩を交え、そしてどこともなくどちらかが謝って仲直りをしたりと、様々な経験を交えている。

しかし、俺の知っている幼馴染とは懸け離れていた。普通はもうちょっと優しくかったりもするんだが、こいつの場合は真反対すぎる。男勝りな上に毒舌で、自分に例え非があつたとしても逆切れを起こし、そのくせ大抵の事を面倒くさがるという傍若無人っぷりを遺憾なく発揮しているのだ。

「ほんつつつと最低、しかもあんなタイミングで入って来るなんて
！！」

そんな勇魔の台詞を聞くと、さっき見た映像が蘇って来る。あられもなく白日の下に晒された触ると柔らかそうな素肌、恥ずかしすぎて真っ赤に熟れさせた顔。

…うむ、いかん。俺は脳裏に焼きつきそうになった煩惱を払いつつ、反論した。

「あんな勇魔、一つ言っていいか」

「何よ」

「俺はお前が誰かに襲われているのかと思って入っただけだ。悪くないはずだ」

「例えそうだとしても、見た時点で前科付きよ」

「……」

あの後結局俺は勇魔から頬に思い切り右ストレートを喰らい、のた打ち回っている所に罵詈雑言はたらけいごんを浴びせされた。

悪魔か。お前は。

「悪魔ねえ…、殺されたいの？」

「…また『魔法』で心を読んだのか」

俺は勇魔のたつぷり込められた殺意の言葉を無視しつつ、冷静に答える。因みに『魔法』で心を読んだというのはそのままの意味だ。この世界にある『魔法』というのは何でも出来る。本当にありとあらゆる事であろうとも、だ。

例えば手からレーザーを放とうと思えば『魔法』を使えば出来るし、レポートしたければ同様に出来る。それでも、色々と制約が付くが。

「何ナレーター風になってんのよ」

「あのな、心を読むのやめてくれ。落ち着いてられん」

「べ、別にあんたの事なんて気にならないわよ！」

俺は何も言っていないが…。

「もーっ！ そんな事はどうでもいいのよ！ 早く準備室行くわよ！」

勇魔は右手で俺の左腕を掴み、足を早めながら前を向いてしまった。
…？ 何をそんなに焦ってるんだ。

「焦ってないわよ！」

「分かった、分かったから『魔法』を使わないでくれ。思っている事を読まれるのは本当に落ち着かん」

「あーもう。ほら！ これでいいでしょ。早く行くわよ！」

これでいいでしょ。って言ったとしても、実際にやめたかどうかは本人以外判別出来ないんだがな。やれやれ。

勇魔は未だ新しい廊下をぐいぐいと俺を引っ張りながら進んでいく。今現在俺達は寮を出て行き、『魔法学校』へ戻った後『高等部一階廊下』を歩いている訳だが。

俺は先程の勇魔との出来事を思い出す。煩惱の方じゃなくなてな。

『そうよ。魔法学校といっても最初に入ったのが私達なんだから、高等部はまったくと言っていい程使っていないの。だから教師さん達

の資料とか道具とかを予め軽く整理しとかないと、いざという時困るのよ』

朝倉勇魔は『現高等部生徒会長』だ。実質的には一番権限を持っているのだが。

『私達がや、る、の、よ。人望つてのはそうやって初めて着いてくる物なんだから』

やれやれ。耳を傾け^{かたむ}やしない。

厄介事というか雑用みたいな仕事を手伝わされる事となった俺としては、面倒極まりない。

「着いた」

勇魔は『準備室』と書かれた場所で足取りを止めると、スカートのポケット部分から鍵を取り出し扉の鍵を開ける。ドアノブが回転しながら、部屋の中が見えていった。

「…埃^{ほこ}が酷いな」

俺の第一声がこれだ。

扉を開いてみる図書館の本棚のような物が立てられており、埃がその上に雪のように積もっている。部屋の小窓から刺し込んだ光によって、普段見えない空気中の埃も反射していた。

さすがは、俺達と同世代に出来た高校。高等部に入ってくるまで誰一人として使って貰えなかったんだな。

「は、入るわよ」

若干現場の悲惨さを見て怖気づいたのか、いつもの勢いがないまま勇魔が資料室へ入っていく。続いて俺。

中は予想していたよりも広かった。

まず入る時に見えた本棚みたいな奴が横一列に並んでおり、途切れたかと思えば小さな正方形の机と椅子が置かれている。

本棚らしき物には資料や道具が詰められたダンボールが置いてあり、殆ど触った形跡がないので本当に置きっぱなしのようだった。

「とりあえずは窓を開けて」

勇魔が部屋の隅にあるロッカーを発見したらしく、中から箒ほうきを取り出す。俺は勇魔の指示通りに小窓をあけた。

ガシャン。と内鍵が解ける音と共に、意外に軽かった小窓を全快にしてやる。…、風通しが良くなったせいで少し肌寒い。

そこから先は勇魔と共に部屋の中を箒で掃いたり、雑巾を使って小窓や床や棚なんかを拭いたりした。

汚れが。というより埃が取れる取れる。別に大量に取れたって意味はないが。錬金術が使えるわけでもないからな。

ある程度部屋全体を綺麗にし終えた頃、勇魔が「届かないわね…」なんて言いながら棚の一番上を見上げていた。

「ほら」

俺は部屋を掃除していた時に見付けた三段型の脚立きやたつを、勇魔の目の前に差し出す。

「あ、ありがとう」

若干戸惑いながらも脚立を受け取り、その場で開いて上っていった。そんなに俺が人の手助けをするのが珍しいのか…。

暫くの間勇魔は「ふんふふーん」とか鼻笛を吹くぐらい余裕を持ちながら、ダンボールを退かしつつ柵を拭いていたりしていたのだが、何かの弾みで、足を踏み外したのかもしれないし降りようとしたのかは分からないが。崩した。

『バランスを』

「あ。」

がらつ。 が が ど ゆっくりと両手を前に突き出し後ろ向きに落ちていく勇魔。

だが、俺は生憎にも必然的にも偶然にも『全てがスローモーションに見える眼』を持っていたので。

反射的に反応出来、落ちてくる勇魔を抱きかかえる事に成功したのは良かった。そこまでは。

そこからが問題なのだ。

俺は『普通』の男子高校生だ。スポーツをしてる訳ではなく勉強をしている訳でもない。

咄嗟に落ちてくる女の子を受け止められる程の筋肉があった訳でもなかった。あるいは勇魔が他とは違い重…。いや何でもない。

だから、俺は受け止められたはいいが。一緒にその場でバランスを崩し倒れこんでしまう。

幸いにも埃は掃除したばかりなので立たなかったのだが、一つ問題が発生した。

衝撃に備え眼を閉じていたので、落ち着いた頃に開いたのだが…。いや、眼を疑ったね。

俺が勇魔に『キス』してしまった。それも勇魔の体^ばに四つん這いで乗りながらだ。

ここで他の誰かが見れば、強盗か何かが偶然犯行を見てしまった少女の口を押さえ付けている所と勘違いされるだろう。押さえ込んでいるのは手ではなく『口』だが。

「
！」

正に眼前で見える勇魔は、眼を大きく見開いていた。今起こっている事実を理解出来ない、というか衝撃すぎて…か？

「ツツ！！！！ 真人の馬鹿あああああああああああああ
ああつつつ！！！！」

数秒経つてようやく何をされたか理解出来た勇魔に、俺は大きく後ろに突き飛ばされ床に尻餅を着いた。意外と痛い。

柔らかかった。との一言に限る感想。しかし、男の俺はいいとしても女の子の『ファーストキス』は大切だろう。少なくともこんな場面ですくす物ではなかったはずだ。

俺はまず土下座で謝ろうと思い、勇魔の方へと顔を見上げてみると。

そこには、

少女が『二人』いた。

- Episode : 3 「変則的な環境」 -

あの出来事から数時間が経った今、俺は勇魔の両親が住んでいる家に来ていた。といつても寮の部屋の一つに当たるのだが。

「よう。込み入った話って何だ？」

勇魔の父親でもあると同時に『魔王』でもある『あひくじすなお朝倉淳』は、部屋の中央にある円卓を俺との間に挟みあぐらで座り込む。

「新崎クンがここで真面目な顔をするなんてなあ……？」

にやにや。と口と眼をいやらしく歪ませながらこつちを見る魔王。
「……さて、これじゃ俺がまるで女子関係で悩んでいて相談しに来たみたいじゃないか。」

笑えない事に、実際その通りなのだが。

「まあまあ、新崎さんも春な年頃なんですねえ」

オレンジジュースの入ったコップを茶色のトレイで持ってきているのは、勇魔の母親でもあると同時に『勇者』でもある『あなぐいせな朝倉瀬名』さんだ。

どちらかというと、「春な年頃」ではなく「春が訪れた」という表現の方が正しいですが。しかし瀬名さんが「春」だと考えるのなら「春な年頃」が正しいです。はい。

「そつだな、俺もそう思うぞ」

「さらりと勇魔と同じように心を読まないで下さい」

そこで瀬名さんは「あれれえ？」と人差し指を頬に当て首を傾げた。正直言ってその動作は反則的に可愛すぎる。何故カメラを持っていなかったんだ俺は。

「新崎さんの話を聞いていたら思い出しましたが、ゆーまちゃん遅いですねー」

彼女が時計を見ながら、娘を心配する複雑な表情をした直後。

「母さん」

「お母さん」

『二つ』の聲がした。同じ音程の、同じ声色の、同じタイミングの。ただ、声に込められた精神だけが違う。

俺達が声のした方へ振り返ってみると、立っていた人物は。

左右に立ち並ぶ『二人』の少女。

少女達は姿こそ瀬名さんとまるで瓜二つなのだが、目付きから雰囲気まで随所ずいしよに瀬名さんとは違う箇所がある。

「適切な処置を求めます」

右の少女は瀬名さんと同じ黄色を水に溶かしたような淡い色の髪をさらさらと空で晒ひしながら、瀬名さんを見つめ続けた。

背筋をピンと伸ばし、一切の感情の変化を覗かせない瞳。整然とした態度からは、厳格なイメージしか受け取れない。一番苦手なタイプかもしれない。

「そーよ。そう。母さん達。新崎を処刑する権限を貰ってもいいかしら？」

左の少女は魔王と同じ漆黒に満ちた。というか全部の色をごちゃ混ぜにしたような黒色の髪を棚引^{たなび}かせ、黒く苛立ちを見せる。背筋を緩め、常に苛立っているかのようなキツイ瞳。近づきたくない雰囲気からは、人付き合いが大変そうなイメージしか浮かばないな。

そんな彼女達を一瞥^{いちべつ}した後に、俺は軽く再び頭を下げながら。

「すみません。『彼女』がああなってしまったのも俺のせいなんです」

「『彼女』？ 達じゃなくてか？」

「はい。まずはそれも兼ねて説明します」

1

俺の説明がある程度が終わると、滅多に見ない真面目な顔を魔王がしながら。

「で。勇魔にキスした時には既に裸の状態でこの『二人』に分かれていたと」

冗談と信じていたのだが、事実は魔王が言った通りなのだ。あの時キスの件で謝ろうとしたら、既に『一人』ではなく『二人』になっていた。

以前は黄と黒を織り交ぜた髪だった物が、今では見事にそれぞれの色として分かれている。

「キスに裸を見るか…」

ぶつぶつと魔王は呟いた後に、突然カツ！と眼を思い切り見開いた後に。

「おいお前。それラッキースケベだろうが！ 何で頂かな」
「父さんは天の頂^{いただき}にでも行ってればいいのよ！！！」

横からライダーキックもどきの飛び蹴りを勇魔（黒）から喰らっていた。部屋の隅の壁まで突き飛ばされたが、あの人なら大丈夫だろう。…それにしても黒の方はやたらと気性が激しいな、まるで近くに俺がいる時の勇魔みたいだ。勇魔の分かれだから当たり前といえは当たり前なんだが。

「あらあらー。丁度娘がもう一人欲しかったのよねえ」

瀬名さんかというと、天使のように微笑みながら勇魔（黄）の方の頭をやたらと撫でていた。撫でられている方は「あ、その…。そこまで撫でられるのも」と先程までの無表情ぶりから一転して、頬を朱に染め上げながら気休め程度に抵抗を試みていた。素晴らしく眼の保養になる。これさえあればさっきの二人組も苦じゃないね。俺までほのぼのしながら眺めていると、いきなり横から勇魔（黒）から脇腹に蹴りを喰らった。何しやる。

「何ニヤついてんのよ。私ばかり見て」
「お前は見てない。俺はあの温かい空間を遠くから見つめて、干渉を受けてるんだよ」

「ストーカー。変態。スケベ」

「どうしてそうなる」

ふん。と鼻を鳴らし再び両腕を組みながら、そっぽを向いた。…気のせいか、さつきより機嫌が悪くなってるのか？

「はっはー。そのまま既成事実を作れば良かった」

「その言葉の前に殺人を付けて父さんに送って上げる……」

満面の笑顔を見せながら立ち上がるとするスケベ魔王に、回し蹴りをしながらマジギレする娘（黒）。娘の方が少しばかり顔を赤くさせているのは、さつきから乱闘をしているからなのか。はたまた恋愛に鋭いが故に恥ずかしがっているのか。あいつの場合だと前者だな。多分。

部屋が静かになったのは、絶え間なく続ける魔王に勇魔（黒）が息を切らしてからだった。およそ一時間程度か、そのスタミナがあれば格闘家になれるかもな。

「そつだそつだ。この娘達の名前決めないとなー」

豪快に笑い続ける魔王に対して、「変な事を言ったら承知しないわよ……」といわんばかりの表情をしながら睨む勇魔（黒）。

「うーむ。何か良い案あるか？」

そついいながら、魔王は俺の方を見つめる。言い出した張本人が考えてないか、まあこの人だから当たり前といえば当たり前だが。

「俺に振るんですか」

「なら俺が考えてもいいぞ。そつだな、苗字はどうせ変わるから……」

「ちょっと待って。今何気に私の苗字変わるって言ったわよね!？」

「気のせいだ」

「新崎あんたも何言ってるの!？」

「黄は紅葉。黒はブラック」

「私だけ妙にストリートじゃない!？ 却下よ却下あ!!」

勇魔（黒）が断固として拒否した為、というか俺もあのネーミングはどうかと思ったので特に何も言わなかった。

正直名前なんてすぐに思いつく訳がない。それに、ちゃんと付けようとするほど時間はかかるだろうしな。以上の理由によりこれ以降手詰まりになりそんな雰囲気が出たのだが。

「^{ゆき}勇気。^{まき}魔気」

俺がぼーっとしながら、何となく思いついた言葉を吐いた直後。

「あ、それいいわね」

勇魔（黒）が賛成してきた。おいおい、たかだか元の名前にそれぞれ『気』を付けたただけぞ。真面目そうなもう片方が却下するに決まっている。

「同じく」

何でだよ。

翌日の学校はちょっとした騒ぎになってしまった。そりゃ「私達二人合わせて『勇魔』です」何て誰も信じられないに決まっている。ユニットなら信じられただろうがな。それが本当だと分かっただけじゃあそうなるだろう。当然俺は主に『あいつ』もとい『あいつら』の関係者と、ごく少数に俺の妹から伝ってきたのか下級生の子らに質問攻めに遭った。多すぎる。

「おいおい、モテモテじゃねえか」と休憩時間に話しかけてくる気丈を、完璧に無視しながらやるもんじゃないと確信出来たね。それでなくても無視すればするほど調子に乗って気丈は話しかけて来るしな。

しかしそれでも当の本人である勇氣と魔氣達に比べれば大分マシな方だろう。あいつらの席の周りにはさつきから引っこ無しに人が群がっている。俺の数倍くらいか？

さすがにそんな面倒な事は昼食の時まで続けなくなかったので、俺は勇氣と魔氣を半ば引く張るように連れ出し屋上で昼飯を食っているわけだが。

「ん？ あの子モゴ『途上監』じゃねえか？ モゴモゴ」

いつの間にか付いてきていた気丈が、エビの天ぷらを頬張りながら未だ白米が数粒付いた割り箸で指し示す。お前な。人を指すな。それと口に食い物入れながら喋るな。

確かに言われてみると、指し示した方には独特の跳ねている髪を兼

ね備えた少女が端の方で一人昼飯を食べていた。表情はどこか浮かなく視線は弁当にばかり向いている。

「ぼっち飯か、可愛そ」

「はいあんたは黙っててねー」

胸元に拳を捻^{ひね}りながら打ち出すコークスクリーブローを魔気から喰らった気丈は、「くぎゅう」と最後の言葉を吐き出しながら白く燃え尽き機能停止。リアルハートブレイク・ショット状態か。

「ちよつと行つて来る」

その場から立ち上がり途上の所へ歩き出そうとする俺に、魔気の方が溜息を尽きながら「本当おせっかいね」とだけ呟いていた。その声色は、どこことなく嬉しそうに聞こえる。

「また今度はどんな悩みなんだ？」

「ひゃ、ひゃうつ！？」

俺が隅に座り込んでいる途上に話しかけると、途上はまたしても体を大きく揺らした後に妙な声を出しながら驚く。この光景昨日も見たな。驚きやすい性格なのかもしれん。

「き、昨日の人…」

眼を丸めながら、青く透き通った瞳で俺を上目遣いで見つめる途上。ただでさえ可愛らしさが溢れ出ているのに、そう見られると余計に可愛らしくさえ見える。

「おう、昨日は悪かった」

「い、いえ…」

終始おどししながら、眼を逸らしては合わし逸らす。知り合いでも友人でもないから当たり前か。

「へっへー、ナンパしてやんの」

にやにやと気持ち悪い笑みを浮かべながらこちらの方へ近づいてきた気丈。こっちくんな。

「おー、やっぱ可愛いな。どうだい、俺と付き合いならぬ突き」

「あんたには桜ちゃんがいるでしょ。暴走しないの」

セクハラをしようとする気丈に、軽く頭にチョップをして釘を刺す魔気。さすがに途上がいる前では暴力を振ったりはしない辺りが元の勇魔らしい。

「それより、途上さんだよね？」

「は、はい」

「もし良かったらでいいんだけど、私達と一緒に昼食を食べない？」

「」

「え…、え」

「あ、嫌ならいいのよ。ただね、一人で食べるより皆で食べた方が美味しいかなと思ったただだから」

「あ…、いえ！ 嫌じゃないです！」

「なら決まりね」

にこりと柔らかく母親譲りの笑みを見せる魔気。それにしても前から思うが、『嫌ならいいのよ』って絶対断れない雰囲気になるよな。

「いやっほー！ 美少女ゲットオー！」

途上と一緒に昼食を食べれると知るや否や、両手にガッツポーズをしながら歓喜に震える気丈。いや、別にお前の物じゃないからな。あとそのテンションどうにかしろ。

結局、途上含めて五人で屋上を陣取る事になった。元々こんな所で昼食にする奴らなんていないからな、未だ春といっても肌寒いからだろう。

「新崎い！ てめよくもたこさんウイナーを取りやがったな！
ウイナーは自分のだ ぶげら！？」

「気丈…魔気…お前ら…」

「よし、成敗。それにしても途上さんのこの髪ってクセ毛なの？」

「そや」

「そや？」

「ああああああ、そうです。はい、そうなんです！」

「貴方達は静粛に出来ないのですか…」

「ふははははは！ 俺はその程度では倒れねえ！ 男のロマンがあるか きゅう」

「男のロマンは認めるが、周囲を女子に囲まれた状態で言う事じゃないだろ…」

騒ぎながら食べる昼食とさりと奪ったウイナーはやけに美味かった。たまにはこういう日も悪くはないかもしれない。

そつだな、ただ一つだけ文句を言えば…寒すぎる。

- Episode : 4 「魔法教育」 -

「断る」

突然だが、俺は少女三人に向かって断固とした意思を見せていた。

「何が不満なのよ」

一番右にいる少女こと魔気は両腕を組み、こちらを睨みつける。よく見れば黒色一色である長髪の両側には、赤いリボンが蝶結びで結ばれていた。意外に似合ってるな。

「純真無垢な少女の願いを無為にするのは頂けないかと思いますが」

魔気の隣にいる勇気は凜とした態度で同じく睨みつける。勇気が動く、ポニーテールが一緒になってゆらゆらと揺れた。お前はポニテか、嫌いじゃないが。

「いや、そういう事は悪くはない」

「下心丸出しね」

「多少なりと　ぐうつ。それは…置いておいて…。途上さん、本当にあの人の所に行くのか？」

俺は唐突に殴られた腹部を押さえ付けながら、発端となった途上の顔を伺う。途上は浅瀬の如く綺麗な水色の髪を揺らし…待て、顔を背けてどうする。

「何怖がらせてるのよ!!!」

「殴るのはやめ　ぐっ」

どうしてこうなってるかって？　数分前まで、俺はただ午後の授業を終えて自室でゆっくりしていた。するとだ、この三人がいきなり部屋へ入ってきて脅迫して来た。『あの人』の所へ行くぞ、とな。やめてくれ、俺は平穏な毎日を教授したい。

「それはともかく、確かに『あの人』の所へ行くのも私もあまり賛成は出来ませんね。『あの人』以外でもいいと思うのですが…」

俺と同じ意見を出す勇氣に対して、魔氣が少しばかり唇を尖らせながら俺を睨む。だから何故俺だ。

「この変態」

「おかしいだろ…」

「知らないわよ。それに『あの人』なら教える事に関しては妥当なはずよ」

「性格が問題なんだが」

「し、ら、な、い、わ、よ。行くったら行くの！」

またこいつ機嫌悪くなってるないか？　機嫌が悪くなるような事はやった覚えがないんだが…。やれやれ、女子って奴は良く分からん。俺と同じ心情だったのか、勇氣も小さな溜息を尽いて諦めたような表情をした。お前の分身だろ、何とかしてくれ。

昨日と同じように強制的に連行され、学校へ行く道から少し外れた場所へと向かう。この方向は『あの人』の家だな。

ピンポンと魔氣が先頭になり二度玄関の前でインターホンを押した。学校の近くに屋敷を建てるなんてアホな事を考えるのは『あの人』と魔王だけだ、確信してもいいね。

それにしても大きすぎるだろうこの屋敷、いくらお金を掛けてるんだ『あの人』。出所は想像が尽くから聞かん。聞く必要がない。

玄関以外は外堀が囲んでおり、よほどの変人でない限りは瓦の積み重なった外堀の上から入ろうとすら思わないだろうな。例え登る変人がいたとしても小さい頃に登って瓦で滑った俺が保障する、あそこは危険だ。

「んーああ？ 誰だ。私の楽しみを邪魔する奴は」

玄関の扉をパタン！ と大雑把に開けて顔を見せたのは『あの人』だ。もうちょい丁寧に扱わないんかね。

「方恋先生。私達です」

そう。さんざん引つ張りに引つ張った『あの人』とは、この目の前にいる女性『方恋かたこい一余』を指し示す。

ぼさぼさとした手入れがてきとーすぎる黒髪。背筋は伸ばしすぎて逆に踏ん反り返ってる様に見えさえる。

赤と白が丁寧に分けられた上下セットのジャージを見事に着こなしながら、勝ち誇ったような表情でこちらを見据えた。

「何だ貴様らか。私と一緒に酒を飲みに来たのか？」

喋れば喋るほどに口から物凄い刺激臭がした。平日の、それも仕事をするかもしれない時に酒を飲まないでくれ。

「絶対に来る訳がない」

「師匠を前に照れ隠しなど必要ないぞ真人。ほら、今も私の胸元に顔を埋めたくて仕方がないのだろう？」

「……」

師匠。方恋一余をそう呼ぶようになったのは色々な事情があつてなのだが、回想したくもなければ思い出したくもなかったので考えない。

師匠は無駄に豊満な胸を前に突き出しながら、魔王と同じような下卑た笑みを浮かべている。…興味がなかと聞かれれば興味はあるが。

「そうじゃなくて、ちよつと先生に『魔法』の授業を受けに来たんです」

わざわざ腕を先導に、体全体を使って俺と師匠との間に割り込んだ魔気。お陰で話が中断して助かった、何と答えればいいのか困っていたしな。

「ん、ということはそこにいる途上も関係する事なのか？」

唐突に睨むように見られた途上は、びくつ。と体を揺らし急いで眼を逸らした。何だこの構図。蛇と鼠ねずみか。

「まあいい。担任の私に頼ってくるとは貴様らもよく分かつてるじゃないか」

師匠が言う通り、実は俺達の『担任』であり体育系で酒癖の悪い先生だ。

開会式当日、豪快に途上を「はははは！無理なら無理だとはつきり言えばいい！」と笑っていたのはどこの誰でもなくこの人だ。

「ついてこい」

一言だけ呟き、師匠は扉を開けたまま中庭へと入っていった。俺達も一緒になって付いて行く。

「ひ、広…！」

久しぶりに途上が喋った内容は、確かに初めてここに入った人なら当然の感想だった。俺も同じ事言ってた気がするしな。

玄関を正面から入った場所は大きな中庭が広がっており、堂々とでかいの表現しかいえないほどの和風の巨大な屋敷が聳^{そび}えていた。中庭には大小異なった石に囲まれた少し濁った程度の綺麗な池がぽつりと存在していて、色の整った錦鯉がゆらりくらしと泳いでいる。周りにはちょこちょこつと盆栽や木が生えていたりしているせいもあって、どこか平安時代にでも迷い込んだ気分さえ陥るね。ただし実際に迷走してるのは師匠の思考だな。

「こつちだ」

師匠が屋敷に向かって歩き出すと、かん、かん。という音が響く。良く見たら下駄を履いてるのか…。

「げ、下駄…」

後ろにいる途上から、引きつったような声が聞こえて来る。確かにな、下駄はさすがに引く。逆に眼を輝かさせてるだ…？

そんな衝撃的な出来事を俺は受けつつ、見慣れた風景を突き進んでいた頃。ふと師匠が扉の前で立ち止まる。

「締めろ」

締める。たったその一言だけで朗らかな雰囲気も浮いた気分も酒の臭いも。

『締まった』

…ように思えるだけで最後のだけは無理だがね、まだ臭うしな。

1

俺達が入った部屋は何畳かの畳が敷かれており、奥の壁には『やれる時にやれ』と書かれた掛け軸が掛けられているだけの殺風景な場所だった。掛け軸おかしいだろ。

「自由にくつろいでいいぞ。ただしイチャつくのは許さん」

ククク。とこちらをにやつきながら見つっ正面に座り込む師匠。それに続いて俺達も各々に座る。この人のボケは出来る限りスルーしておいた方が楽そうだな。

「さて途上。貴様に聞くが、『魔法』とは何だと思う？」

「想像でいいがな」と付け足し、懐から一升瓶を取り出し口飲みする師匠。まてまて、さも当たり前のように取り出してるがその大き

さの酒をどうやって隠していた。それと仕事中に酒を飲むな。暫く良い臭いのする青の髪を揺らしおろおろしていた途上だったが、決心するかのように息を飲み込んで答えた。

「ほ、炎の塊を投げたり。回復魔法を唱えたりですか…？」

「質問を質問で返すみたいになってるじゃないか。まあいい、大体あつてるが『違う』」

師匠は話しの合間に飲んでいた酒をその場に置き、何か決意をしたような表情をして。

「『こついう事』だ」

前から聞こえていたはずの声が、急激に横から入り込んで来た。ついでに、無駄に『誰か』が俺に体を密着させてやがる。

「え！？」

声を出していた本人が唐突に消え、驚いた途上は辺りを見渡し気づいた事実によつて更に驚く。

「ははは、久しぶりだな」

師匠が俺の隣に座り込んでいる、それも一瞬にしてだ。確かにこれも『魔法』だが…、分かりづらいたろう。

「戻るぞ」

次の瞬間。音も立てず、元の位置に座り込んでいた師匠。やめてくれ、本当に不気味だから。

瞬間移動するにしても音が何か立てて欲しい。いきなりまるで最初から『そこにいた』かのように座られるのは恐怖だ。

「他にもこういう事だって出来る」

師匠が手を開きながら前へ差し出すと、隙間なく埋まるかのようにジギジギジイジジ！ と火花が散る音と共に雷の剣が出てきた。

「す、凄い…」

驚嘆のあまりか賞賛としてなのかは分からないが、青の瞳を輝かせながら魅入る途上。可愛いな。

「こんな所か」

師匠は半開きにしていた手の平を、拳骨の形にして閉じると同時に雷の剣も消え去る。そこで再び置いてあった酒瓶に口を付けた、だから飲むなよ。

「よく聞け途上、『魔法』っていうのは基本的には『何でも出来る』。多少は制約があったとしてもだ」

「な、何でも…？」

「そうだ、故に『魔法』は想像力に直結する。発想も出来ない奴ほど『魔法』は使えこなせない」

「本当は想像力だけじゃ駄目なんだけどね…。でも確かに前提としては必須よ」

溜息を尽きながら、師匠の説明に補助を加える魔気。割り込まれた師匠は「おら、バトンタッチ」とでもいいいたげな顔をしながら、本

格的に酒を飲み始めた。仕事しろよ。

「大規模な『魔法』を使ったり高度な『魔法』を使うにしても、その代償に見合った『魔力』を消費しなきゃいけないの」

「『魔力』？」

「魔法を使うのに必要な力よ。但しゲームや漫画なんかと違って人や動物だけじゃなくて、万物に存在するんだけれど」

「人だけじゃない…？」

「そうよ。木だって石だって水だって何かにしろ、力を持ってる。ただ私達動物だけが『考える』って事が出来るから具現化出来るだけ」

「古来の日本なんかは万物に神が宿るとして崇めていた節もあるだろう、『魔力』の概念はそれに当てはまるわけだ。最近の奴は忘れてたりするがな」

酒を片手に、右手で口元を擦りながら話に割り込んだ師匠。うおっ、さっきよりも臭いが！？

「あと自然なんかは自身で勝手に空気中に発散したりしちゃうから、『魔力』は殆ど所持してないんだけどね」

「そうなんだ…」

「それに人が自身の体内で作る魔力なんかも個人差があるのよ、才能と同じように。固定じゃなくて肉体の成長によって変動するんだけど」

「才能…」

「つまり私のような天才は魔力が滝のように溢れ出てるが、私の弟子新崎を含めた一般ピーポー共は平均的な魔力しか精製出来ないという訳だ」

「さり気なく混ざりつつ、自分を誇示するのはやめてくれ」

どさくさに紛れていた師匠を止めつつ、俺は右手で頭を抱えた。やれやれ、どうしてこの人はいつもこうなんだ。

「これくらいならいいだろう。それともどうした？　もしかして私に嫉妬を妬いてくれているのか？」

「ないな」

「照れ屋なんですからー」

「いきなり瀬名さんの真似をしないで下さい」

「ちっ、冷たい弟子め」

「はいはいはい！！　今日は授業を受けに来たのですから、方恋先生もほどほどにして下さい」

魔氣が慄然^{りっぜん}とした態度で、師匠の一方的な俺への弄りを中断させる。

「…やれやれ、私の周りには冷たい奴しかいないのか」

ぶつぶつ言いながらもしっかりと口を塞ぎ、その代わりに酒瓶を逆さにし一気飲みする師匠。一気飲みは死亡確率が高いから本当にやめてくれ。

「さてと、魔力については軽く説明し終えたけど。実は魔力の精製っていつても限度があるの」

「限度？」

「いくら少量しか精製できなくても小さな頃から作れたら、いつかは巨大になるでしょ？　それを妨げるかのように足枷というか器がある。私達はその事を『許容値』って言ってるけどね」

「『許容値』…」

「ようは『魔力』が水で、『許容値』がその人の限度を示すグラスなのよ。水はグラスを満杯にはするけれど、そこから溢れさせることは出来ない」

「…それも、大小が異なるん？」

「え？ え、うん。魔力と同じで『許容値』も人によって異なるからね。ただこつちの場合は魔力と違って生まれた時から固定されてるけど」

「この子…、一瞬間西弁喋らなかった？」と首を傾げながら、魔気は考えていたようだ。「気のせいよね」と呟き考えるのをやめたようだ。残念ながら気のせいじゃないんだがな。

「魔気。休憩しましょう」

ここに来てから一回として喋っていなかった勇気が、和の雰囲気に合わせて短く。簡単に呟いた。

「そうね。一回じゃ全部覚えるのは無理だと思うし、また途上さんの予定に合わせて授業を受けようか」

「了解」

「は、はい。分かりました」

「別に構わないが、俺が来る意味ないよな」

「うるさい、あんたも来るのよ」

やれやれ、今日だけで何回「やれやれ」って言ったんだか。溜息しか出ねえ。

「私の授業を楽しみに待つがいい」

にやにやしながら俺の肩を叩く師匠。殆ど貴方から授業なんて受けてない気がするが、この人の授業なんてまともじゃないからまあいいか。

「以上。解散！」

魔気のその一言によって、俺達の高等部に進級して初めての『魔法授業』は終了した。

2

月光が刺し込み風につられて揺れる桜を見ながら、私は一人で外にそのまま繋がっている廊下で酒を飲み続ける。

「まったく、子供ってというのはあつという間に育っていく…」

皮肉を呟き、大きな酒の入った杯を片手に飲む夜空は綺麗だった。一つ一つの星が輝きを持ち、自分を象徴している。

庭に咲いている桜の花びらが池に落ち、波紋がそこから一斉に広がっていった。

「貴方も…こういう気分だったんでしょね」

それは現在の新崎に『師匠』と呼ばれている人物の性格とは、まるで懸け離れた声色。私であり、私でないもの。

ふつ。とまた今の私らしい皮肉めいた笑いが零れ、^{こぼ}自虐するように呟く。

「お陰で、私の隣は未だ空いたままだよ」

「残念だったな、俺がいる」

すつ。と小さな音と共に私の隣に座り込んでいる奴がいた。所々が破れた黒装束、そこから覗かせる漆黒の髪と端正な顔立ち。

「『魔王』か。丁度いい、付き合え」

「おー、いいぜ」と言いながら私が差し出した徳利とくりを受け取り、熱あつ燗かんを杯に注いで一気に飲んだ。相変わらず良い飲みっぷりしやがる、このクソ野郎。

「綺麗だな……」

二杯目に突入した魔王が、舞い散る桜を見て感慨深く言う。

「といっても、桜が咲く季節も早まっているらしいからすぐ枯れると思うが」

「再確認できた。貴様は雰囲気壊すのが得意だな」

くつくつく。とお互いに下品な笑いを漏らしながら、酒を飲み続ける。

少しの間は静寂に身を任せ、流れ続ける風景を眺めていたのだが。私が面倒になったので切り出す。

「さてと、貴様がここに来たのも理由があるのだろうか？　ただで嫌っているクソみたいな親友の所に来ると思えん」

「……」

「転入生の事と貴様の娘達の事なら心配するな。転入生の子は何ら

問題はなかったし、娘達も異常なんて物は見ている限りではなかった」

私は止まっていた手を動かし、杯に酒を注いで一気飲みする。すると、魔王は少しだけ寂しそうな顔をして。

「助かった」

それだけ呟いた後に、来た時と同じように静かにここを立ち去った。酒に付き合えと最初に言っただけなんだから、あのクソ野郎。

「やはり一人で飲む事になったじゃないか」

廊下にぽつんと置かれた徳利を一瞥した後に、また一人月光に塗れたこの世界を見て囁く。良くも悪くも、過ぎ去っていく現実に向けて。

- Episode : 5 「昔」 -

俺が師匠の『魔法授業』を終えたその夜、夢を見た。内容はだいたい二年前になる頃に起こった『あの出来事』だ。『あの出来事』が起こった日はまだ中等部二年の冬休みを終え、明けて少し学校に慣れ始めた時。

その頃俺はまだ方恋一途を「師匠」と呼ぶ前で、妹である「新崎桜」は恋を知らず、昔からの親友である「気丈徹」が優等生を維持し、「朝倉勇魔」もまだ分裂していない。

冬の寒さが残る中、「バレンタインデー」を迎える為に準備するには早すぎる時期に『あの出来事』が起こった。

都内に買い物に出かけた「気丈徹」と「新崎桜」が、海外のテログループに『誘拐』されたのだ。

1

その日俺は朝に寮の管理人である瀬名さんから二人が出掛けたという話を聞いた以外に、特に目立った出来事もなかった。

眠気に襲われていた授業を気力で乗り切り、眼を覚ます為にトイレへ向かっていた最中に、それは聞かされた。

「桜と気丈が反魔法テログループに『誘拐』された…!？」

「…静かにしろ。他の生徒に知られると厄介だからな」

俺が思わず周囲に漏らしそうになった声を、方恋先生が押さえ付け喋らないように口止めする。

「廊下で話すのもまずい、こっちへ来い」

半回転した後スタスタと走り歩きのような速さで歩いていく方恋先生に、俺は困惑しながら付いて行く。まさか、あの二人に限って…歩いていく度にもしも二人が酷い目に会っていたらという血の気の引くような考えと、冗談好きな方恋先生が嘘を付いているんじゃないかという猜疑な考えが浮かぶ。

故に人気の少ない場所に辿り着き立ち止まった方恋先生に、俺は呟いてしまっていた。

「嘘だろ…？」

「ならそう信じればいい、貴様の妹と親友がどうなるかは知らないが」

「…すいません」

つまらない物を見るかのような瞳をした方恋先生に、俺はすぐさま謝罪をした。信じたくないが、確かに桜と気丈の姿を朝から見ない事から本当なのだろう…。

「都内に買い物に行った所を狙われたみたいだな」

「待って下さい、そういうケースなら今までだってあったはずですよ。何で今更…」

妹の桜と友達の気丈が。と喉元まで出掛けた言葉を飲み込む。一瞬だけ人の命に優劣をつけてしまった。

「校長である魔王が昨日から不在だ。テログループとしても絶好のチャンスだったんだろう」

「偶然…、タイミングが良かったから狙われた」

「そういう事になるな」

「くそッ！！！」

思わず壁に向かって拳を突き出し殴る。筋力も無ければ格闘技をしている訳でもないのに、自分の拳が痛くなるだけだった。ただどうしようもない気分になる。けれど、何かやらなければ仕方が無いような気がして、小さく尋ねる。

「…誘拐って事は、手紙か何か来ていたんですか？」

「ああ、電話だ電話。やつら電話を使って伝えてきたよ。なーにが『人質』と『魔法技術の提示』との交換だ、腹が立ったから電話にでんわ！ って言ってやった」

「交換場所の指定は」

「ない、当日指定場所を伝えるって言うていたからな。喋ってる間逆探知やらやろうと思ったが、用意周到に対策されてやがった」

「前々から狙っていたみたいだな」と呟く方恋先生を他所に、俺は密かに打ちひしがれていた。だってそうだろう、まさか自分の身の回りでこんな事が起こるなんて考えない。

「…すいません、外の空気吸ってきます」

「おう。ただしあんまり風に当たり過ぎるな、風邪を引くからな」

俺はその場を後にし、学校の外へと歩く。途中で授業の開始を告げるチャイムが鳴っても、俺は構わず外へ出て行く。風にとりあえず当たりたかった。

2

「今から二時間後の、ここだ」

きゅっ。きゅっ。と長い机の上に置かれたこの辺りの地図に、赤い油性ペンでマークが書かれた。

方恋先生が俺に喋って半日が経過した今、深夜となる時間帯なのだが。三十秒ほど前に犯人グループから電話で場所の指定を受けた。

指定された場所は近くにある町から外れた所にある、元はホテルだった廃墟。^{はいきよ}

マークを書き終えた方恋先生は、机を囲むようにして椅子に座っている俺と勇魔を含めた生徒会と、魔法で関係のある学校関係者を一^{いち}瞥^{べっ}した後に。

「とりあえずは私一人で行こう。他の奴らはそれぞれの役割があるだろうし、人が減って生徒達に感づかれたくもないしな」

そう宣言すると端にいる朝倉瀬名さんはあまりして欲しくない、

心配そうな表情をして呟く。

「方恋さんがそう言うのなら……」

間髪入れずに瀬名さんの隣に立つ、学校の『警備員管理長』という役職に付いている魔王軍幹部の一人が答えた。

「同意。我々『警備隊』も最も影響が少なく実力があるという点では貴方を評価している」

この人は昔から魔王以外に対しては冷たくあしらうタイプだが、今も尚それを発揮するとはな……。そんな警備員とは机を挟んで反対側に座っている複数人の内、代表格らしき女性是小動物のようにぶるぶると震わしながら右手をゆっくりと上げる。

「は、はひい。私達『使用人一派』も異論なしですう」

喋り方が相変わらずおかしかったが、俺は特に気にしない。そして最後に、待ちかねたように俺達を含めた生徒会をまとめる代表格の人物が賛成を示す。はずだった。が。

「私も現地に行く」

生徒会長である勇魔の発言によって、空気が一瞬にして反転した。もちろん、悪い方向で。

「勇魔……お前。小規模だとか大規模だとか関係なしに、テログルーブなんだぞ？」

俺は思わず立ち上がりながら、勇魔の考えを止めようとした。けれ

ど、勇魔は首を振る。こいつ、何を考えているんだ？

「私は私の名前の通り、この世で最強の魔王と勇者の娘。私はそれを誇っているし、たかが人間に負ける程落ちぶれていないつもりよ。それに方恋先生一人だけじゃ危険だと思うの」

「ついでに、私は生徒だから影響も少ないと思うしね」と苦笑いしながら勇魔は方恋先生の方へと顔を向ける。

対して俺達が話している間に、支度を終えたらしい方恋先生がこの人にしては珍しく、冷めた顔付きをしながら。

「貴様は来なくていい、『足手まとい』だ」
「ッ！？」

勇魔を突き放した。

「わ、私は自分の身ぐらい守れます！」

「そうじゃないさ、まあ聞くが。貴様、人を殺せるか？」

「え……？」

「確かに貴様は『絶対結界』という無敵防御魔法があるが、それは自分だけであって他人までは守れないんだろう？ もしも守りきれなくて、テロリスト共を『殺さない』といけない場面になった時、貴様は殺せるのか？」

「……」

もしも勇魔と方恋先生が手を組めば万が一がない限り、絶対に死者を出さずに全てを終えられるだろう。だが、勇魔は万が一が起こった時。俺の親友と妹と、テロの命を天秤に掛けることになってしまったら、仕方がなく『殺す』しかなくなるだろう。覚悟も決意もなしに、その場の感情だけで決める事になってしまう。

そしてそれは同時に、優しすぎる勇魔の最低でも永久の罪悪感、最悪の場合永久のトラウマとなる。

「だから『足手まとい』だ」

「ま、待って下さい！ 私は…」

「後は頼んだぞ、貴様ら」

数回の瞬きの間で部屋の窓から体を乗り出していた方恋先生は、すつ。と映画に出てくる忍者がその場から立ち去る際に出す音すら、一切と出さず無音で消えた。

「私は…」

感情を出し切る前に断ち切られた勇魔は、一言呟きながら表情を落とす。あいつの周りにいる見知りの生徒会役員共が多少のざわつきの後、一人、また一人と、申し訳なさそうな顔をしながら出入り口から出て行き、『警備隊』達は無言で部屋を立ち去り、『使用人』達は代表格らしき女性に「く、空気を読みましょう！」と命令されその場を後にした。

残ったのは勇魔と俺と勇魔の母親である瀬名さんだけだ。長方形に伸びる机に対して、暫く三人だけが座り込んでいたが、瀬名さんが立ち上がって。

「ゆーまちゃん、今日も冷えると思いますから、しっかりとお布団被って寝て下さいね…」

慰めなぐさでもなく同情でもない、母としての娘への優しさが込められた言葉を勇魔に掛けて、寮へと戻っていった。

「勇魔。戻るぞ」

物凄く声を掛けづらい空気の中、俺は何とも言いがたい圧力に耐えながら勇魔に声を掛ける。重すぎる、重すぎるぞ。

「そうね…」

いつもの勇魔らしくない、覇気がなく精気を感じられない声。やれやれ、落ち込みすぎだ。

月明かりが窓越しに差し込む学校の暗い廊下を、俺達は互いに喋ることもなく距離を取りながら歩いていた。なんというか、自然とそうなる。

「俺は、お前が行かなくて良かったがな」

「ッ！！」

俺が苦し紛れの話作りをしたとした途端、勇魔が移動するのをやめてその場で立ち止まる。肩は小刻みに揺れ、視線は下になっていた。たので表情は見えなかったが、分かった。

「助けたく…ないの？ あんたは…、桜ちゃんと気丈の奴を助けたくないの！？」

勇魔は両手に拳を握りながら肩を強張らせ、瞳に涙を溜め悔しそうな表情をしていた。そして、内に溜まっていた物を吐き出すかのように、叫ぶ。

「方恋先生から誘拐の話聞いた時、あんたは驚かなかった！？ 怖い事考えなかった！？ 私は気が気じゃなかったわよ！」

触れてしまえば折れるような、そんな様子を見ながら、俺はなんか無性に冷めていた。いや、冷えさせてもらった、か。

「そうだな。俺も思った」

「だったら何でそんな平気そうなのよ！」

「怒る前に、お前が怒ったしな」

「え？」

俺の答えた言葉に、一瞬にして怒り顔から啞然^{あぜん}とした表情をする勇魔。

「俺だつて妹を誘拐した奴をぶん殴りに行きたくて仕方がないが、実際お前みたいに実力や才能がある訳じゃないしな。口出しできずに内心腸煮え返^{はらわた}っていたんだぜ。どうしたもんかと考えてたところを、先にキレられた訳だ」

「そう、なの？」

「俺は別に、聖徳太子でも孔子でも聖人君子でもない」

「…前の二つは例えになつてないし、よくよく考えたらさつき喋つてた事も氣丈が誘拐された事は別にいいのね」

「さてと、あの人を信賴して家でどんと座つて待つておく事にするか」

「あの方は信用ならないわよ、それとそれはただゆっくりするって言つてゐるわよね」

「そうだな」

くす。と怒った顔から笑顔が零^{こぼ}れ出す。いつものがさつで男勝りな勇魔からは考えられない仕草だったので、可愛らしさすら覺えた。まあ、怒った顔よりは笑った方がいいに決まっている。いつも笑ってくれればもうちょい男も言い寄ってくれるだろうに。

そして微妙に軽くなったのか分かりづらい足取りで、寮で吉報を待つことにした俺達は帰って行く。

3

翌日、豪快に笑いながら殴りあう魔王と方恋先生の姿が学校に入つてすぐに見えた。なんでも聞いた話、方恋先生が「貴様がさぼったせいで面倒な事になったじゃねえかコラア」とイチヤもんつけてから始まったらしい。物凄く理由と動機がガキっぽいな…。というのはどうでもいい。そんな事よりだ。

「きーじょう先輩っ！」

「あ、あのさ。桜ちゃん何で昨日からそんなくつついてくるの？」

隣では無事生還してきた気丈と、朝からポニーテールを派手に揺らす俺の妹が、何故かだ。何故か、イチヤついてやがった。

「……」

一体何があつたんだお前ら。気丈が惚れるなら分かるが、逆パターンで来るとはな。まあ桜が惚れるなんて、あいつなりに何か頑張っ

たんだろ。聞かないでやるぜ。

「何が合ったのよ……」

代わりに俺の心を読み取るかのように、うつとうしい物でも見るかのような視線を気丈達に向けながら呟く勇魔。その気持ち分からない。

「でも、日常が帰ってきたわね」

たった一日にも満たない半日、世間では他愛のない時間で俺達は劇的に変わった。真面目な好青年だった気丈はスケベキャラへと変身し、まるで恋愛の気がなかった妹は恋を満喫し始め、勇魔は精神的に何かが変わって、因みに俺はというと……。

「俺を鍛えてください」

方恋一途先生に土下座をしていた。

「くくく、貴様がか、いいぞ。ただし私の修行は決して安くないがな」

「楽じゃないじゃなくて値段なんですな……」

「うるさい、酒代が足りんだ」

少しばかりふざけた行為が続いた後、俺は正式に方恋一途の弟子となり鍛錬を受け始めた。柔道や空手やテコンドーを含む格闘技や柔術や射撃技術などレパートリー様々に。これが役に立つ場面がない事に気づいたのはおよそ一週間が経ってだ。

そして短くとも長い思い出の最後と共に、俺の夜は明けていく。

ギリギリギリギリギリギリギリ！　金切り声のような耳を塞ぎたくなる音が耳元に入った途端。俺は夢から現実に戻っていた。

「うん、はい。そうと」

耳元で鳴り続ける道具もとい目覚まし時計を手探りで探し当て、叩くように止める。

ふわあ。と大きく欠伸をしながら両手と背筋を伸ばし、未だ半分しか開かれていない瞼を擦った。

「……また懐かしいのを見たな」

そうして、俺はまた魔気達と最近知り合った途上藍のいる『今』の日常へ戻る。

・ Episode・6「デッドオアライ」・（前書き）

閑話休題。

- Episode : 6 「デッドオアライ」 -

懐かしい夢を見てから一週間が経過した頃。

「何で私が夜間の校内見回りなんてやらないといけないの！」

時計の短針が午前零時を越え、密かにちくたくと音を鳴らしながら時を刻んでいる中、俺の隣で魔気が大声で叫ぶ。

「俺だつてやりたくない……」

溜息を尽きながら懐中電灯を片手に歩く俺。正直言つてかなり寒いし暗いし眠い、そして俺は隣に居るこいつを恨むね。何故ならこうなつた発端はこいつのせいでもあるからな。

『勇氣と魔気が生徒会の仕事をしつかりとこなしてくれない』

顔見知りの生徒会役員の一人から、授業との合間である休み時間に伝えられた。俺は生徒会には入っていないので詳しくは知らないが、なんでも魔気は単純に仕事をせず、勇氣は一切の休憩を入れない為付き合う役員がいけないという。その為になぜわざわざ勇魔を分裂させる原因を作つた俺が、こいつらの手伝いをしろ。というらしく、現在進行形でこなす事となつてしまった。

普段着と違い制服を身に纏^{まと}い、夜の闇に溶け込む髪をさらさらと揺らしつまらなそうな顔をする魔気。付き合いされる身にもなつてくれ。

「大体、『警備隊』はどうしたのよ」

「あの人達にも都合があるんだろ」

「どうだか」

「お前な…」

勇魔が言う『警備隊』とは、学校周辺を守る「対危険及び災害」組織を指している。元は魔王直属の部下の一人が設立したらしく、魔王一族に対する忠誠が凄すぎて見ている側が引きそうになる程の連中だ。こういう自警なども本来は警備隊がやるべき事なのだが、今回は高等部の生徒会にその役割の一時的な代理が頼まれたのだとさ。

「面倒よ…面倒面倒…」と愚痴って両手を前に差し出し、ゾンビのように死んだ目でだらけながら歩き出す魔気。お前、仮にでも男子の前だから体裁ていさいぐらいは保てよ。

「それでも、一昨年の『事件』が起こるよりはマシだろ」

ぴく。と魔気の歩みが止まる。あの事件はつい最近夢でも見たが、気丈と桜が誘拐されるなんて二度とごめんだ。

気づけば魔気はこちらに顔を向けながら、「当たり前でしょ」と言いたげにしている。喋って意思表示してくれ。

そうこうしている内に、俺達が担当するべき場所の見回りが終わったので集合場所へと戻る。集合場所は学校に入って直ぐの場所一般の学校なら下駄箱にあたる場所なのだが、どこか金持ちの貴族の家かのように馬鹿広い大広間となっていて中央には丁字型の階段が二階へと繋がっていた。待っていたのは相変わらずおどおどとしている途上藍と、凜と咲く花のように凛然りっぜんと立つ勇氣との珍しいペア。

「こちらは完了しました」

「お、同じく…」

実は関係ないのに強引に魔気によって連れて来られた途上。深夜という眠い時間に叩き起こされる気持ち、分かるぜ。

「次は二階部分ね…、はあ。勇気行くわよ」

溜息を尽きながら合流した勇気の手を取り、ずかずかと丁字型の階段を上っていく。もしここで帰ろうとしても、もう一人の自分である勇気に止められると分かったんだろうな。

しかし、それはさて置いて。……二人きりになったという事は、『あれ』が始まるのか。

「うちらは三階部分やね！」

「……」

突然途上は不安そうな顔から嬉しそうな笑顔に切り替え、あまり進んで動かさなかった口で関西弁を意気揚々と喋った。

いつもの途上を知る者なら絶対に「ありえない」と豪語出来るはずの光景が、今俺の目の前で繰り広げられる。

「どないしたん？」

「…。いや、慣れないな。匠の力でもそこまで劇的に変わらんぞ」

「うちは家扱い！？」

勇気と魔気がいた時の消極的な態度から打って変わり、激しくオーバリアクションをする途上。

きっかけは新入式だったかもう忘れたが、あれから数日経った放課後の事だ。俺はあまり喋ったり積極的に行動しない途上の数少ない接点だったらしく、まだ学校に慣れていない途上の為の案内人とし

て担任の師匠に頼まれた。その為俺と途上は必然的に行動を共にするようになり、少しずつ途上が本性というか個性を出すようになったのだ。

最初は時折関西弁を交える程度だったのだが、今となつては完全に喋つてゐる。どないことやねん。

未だに信じられないさ。まさかあの恥ずかしがり屋な所がちよつぴりそれが可愛らしくて、小動物のようにおどおどしていた途上が。なんてな。

「で、俺らは三階か？」

「それさつきもいったやん」

「あー、そうだな。よし行こう」

「適当！？ しかもうちを置いていこうとしてる！？」

口と瞳を大きく開きながら、すたすたと先に歩く俺に対して的確に突っ込みを入れ。「ま、待ってーな！」と子供が駆けっこするかのようには腕をぶんぶん振り子のように振らしながら走ってきた。若干子供っぽくて可愛らしく思わず微笑みそうになった、危ない危ない……。

暗く照明とやや不気味に光る火災ランプに照らされ、先が見えずらい廊下を懐中電灯を使って突き進んでいく。

「いつもいつも思うんやけど、この学校ってほんまに変。くねくねしてるっていうか、構造がおかしいやん」

「確かにな。あとだ、あまり知らない道に行かない方がいいぞ。下手したら二度と戻ってこれない」

「へ？」

「十数年この学校にいるが、未だにどこがどうなってるかが分から

ない所もある」

「そ、そこまで広いん!？」

「迷路のような場所もあるぐらいだしな、気をつけておけよ」

「うん…分かった」

暗い所なので少し気を張っていたのか、魔気や勇気達が居た時のように急に辺りを気にし始める途上。少し驚かしすぎたか？

「うう…、ほんまに大丈夫なんやろうか…」

先程と打って変わっての弱気の発言。それは分からないでもないが、あのな…ただ言っていていいか途上。

右腕にしがみ付いて来るな。

途上が俺の右腕をガツチリとホールドしているので、柔らかな髪が俺の首辺りにさらさらと撫でるように当たり、心地の良い香りが入ってくる。

無意識なのか怖がって俺に引っ付いているのか分からんが、とりあえず俺も健全な男子高校生なんだ。やめてくれ、冗談抜きに。

ひた。ひた。といつのまにか歩調すら一緒になりながら俺と途上は歩き続ける。もちろん俺の右腕は固定された状態だな。

すると突然ゆっくりながら動いていた途上の足の動きが止まった。振り返りながら俺は尋ねる。

「どうした？」

「あ、あれ…!」

思い切り体を震えさせながら前方を指差す途上。その表情はみるみる内に髪のように青くなっていき、不安そうに目を見開く。

「……？」

もう一度正面へと戻って見ると、俺は即座に理解出来た。

廊下の奥の方から黒い影で人の形をした何かが、こちらに向かって近づいて来ているのだ。

「…隠れる」

すぐさま途上を右手で遮るように、丁度物陰になる場所があったのでそこへ隠す。そして俺は壁に張り付きながら少しだけ顔を覗かせた。

高さは大人とも言い難いし子供とも判別し辛い微妙な所だ。体つきが細い所からも考えて、どちらかというところ中等部辺りの子供に近いかもしれない。

この学校は仮にでも魔王が統治している。常に魔王の所有するここを含めた土地全てにはあの人の魔力探知結界が張られているので、侵入者という考えも少ないだろう。

やはり、この学校の生徒というのが妥当だろうが…。もしもの時を考えると確証を持ってない。

しかし誰かという事も含めて姿を見るにはこの廊下は暗すぎる。こういう時に妹の桜を含めた優秀組なら魔法を使って、即席の暗視スコープを作るなり変化させるなり出来るんだが…。

「だ、大丈夫？」

後ろで小さく俺の裾を引っ張りながら小声で尋ねて来る途上。大丈夫かどうかは知らんが。

しかし、その声がいけなかった。

廊下で同じように小さく小さく響いていた、足音が途上の囁きと共に

に止まる。そして止めた本人は真っ直ぐとこちらを見つめていた。

「……」

「……」

向こうは相変わらず声は出さず動きこそ変化はない。しかしどう考えてもこれ絶対向こうはこっちに気づいているだろ。

すると、先に黒く塗りつぶされたような人型の影がぬらりと動き、影が取る次の動作に備えて俺は身構えた。のだったが、影が取った行動は意外だった。

「兄さん、何やってるの？」

「は？」

思わず反射的に返事をしてしまったが、影が発してきた声と単語にも聞き覚えがある。それに俺の事を「兄さん」と呼ぶ人物は…。

「貴方が途上先輩ですか。気丈先輩の会話からも伺いしています。私はそこにいる真人兄さんの妹の新崎桜と申します！」

他ならぬ。ポニテを大きく上下に揺らしお辞儀をしながら、さらりとストーリーカー発言をしてる新崎桜だった。

廊下のと真ん中で立つというのも不自然だったので、桜をメンバーに加えつつ再び見回りを開始した。

「す、凄い丁寧に手入れしていますね…」

俺の隣では興味津々に途上の水色に近い淡白な青色をした髪を見ながら、桜が感嘆の声を洩^もらしている。

「それほどでも…」

まんざらでもない気分なのが分かるぐらいに、嬉しそうに照れている途上。桜がいるので絶賛性格封印中に淑^{しと}やかさが付いて来るぞ。

「いや、手入れがされているのは分かるが。そこまでなのか？」

「男の兄さんには分からない事なんです」

きつぱりと切り捨てる桜。俺には「綺麗だな」ぐらいしか判別出来ないんだが、ここらへんが桜の言うように男女の違いなんだろう。なんともなしに話題が切れてしまったので、先程疑問に思っていた事を聞くことにするか。

「桜。何でお前こんな時間に学校にいるんだ？」

俺の質問を聞いた桜は、「あはは…」といいながら眼を逸らしやがった。

「待て待て待て、百歩譲ったとして本当の事を言え」

「ワタシニホンゴワカラナイアルヨ」

「いやいや、もろさつきまで喋ってたろ。しかもそれ日本語だから」

「…日本語でおk」

一瞬途上が何かを呟いていた気がしたが気のせいだな。対して桜は暫く目を泳がせていたが、諦めが着いたのかこちらを見据えて答える。

「んー。生徒会の仕事だよ」

「生徒会？ 魔気達の手伝いか？」

「…そんな所かな」

渋りながら答える桜。魔気達から何も聞いていないが、単に俺達に伝えていないだけだろうか。毎回思うがこういう行き違いが面倒だな。

桜が所属して会長を務める生徒会と、勇氣魔気コンビが会長を務める生徒会とは実は組織的に別だ。桜は中等部なので『中等部生徒会長』。勇氣魔気コンビは俺達と同じ高等部なので『高等部生徒会長』となっている。

それぞれが生徒会長や学年毎の風紀。現時状況などの様々な要因が合わさり混ざるので、同じ生徒会といっても行動や方針などは殆ど別物といってもいいだろう。

共通の物といえば、位が高等部の方が高く。それぞれの生徒会役員達が『現地魔法行使権限』と『現地魔法行使同伴権』を所持している事ぐらいだ。

だからこういう「伝えられてない」「伝えてない」などの行き違いは良くある。まあそれは分からない訳がないが、これはそういう事じゃねえなと今確信出来た。

「桜、嘘なのは分かる。もし本当に生徒会の仕事なら腕章を付けているはずだしな」

ギクツ。とシリアスアンドミステリアス雰囲気を出してましたよ。という表情をしていた顔が、一気に硬直した。

それもそのはずだ。中等部生徒会長である桜が本来『仕事』をする時に腕にくくりつけるはずの腕章を着けていないからな。

いきなり数秒にして見破られた桜は、直ぐに涙を出すほど笑いながら呟く。

「兄さんは相変わらず『目』の付け所がおかしいよね」

「まあ、目だけはいいからな」

俺が答えると、桜はわずかに零れた温かい涙を擦って。

「うん。そうだ」

ぼこお！ と聞きなれない変な音をしながら姿を消した。

「桜！？」

「桜ちゃん！？」

唐突に襲われた消失に、俺は途上が言ったちゃん付けに驚く暇もなく辺りを見回すと。丁度俺達が立っている廊下の先。

空中に床でもあるかのように言葉通りに「静止」しながら倒れている桜の姿があった。そしてそれが意味するのは『魔法』が使用されているという事だ。

同時に、辺りを見渡した直後まで感じていなかった気配を後ろの方から感じる。

「くそっ！！」

とりあえず後ろの気配が誰なのか、それとも物なのかという事はどうでも良く、俺は勢い良く後ろへ回し蹴りをした。

「痛いっ！？」

声が聞こえたのでどうやら人だったらしく、確信の感触を得ると共に、廊下の地面へと叩きつける。

「途上！ 桜を連れて逃げろ！」

「で、でも」

「いい！ 早く行ってくれ！」

困惑しながら立ち尽くす途上を強引に、桜の元へと走らせた。大体生徒会長である桜に不意打ちで魔法に掛ける理由は何にせよ。まともな思考から考えられる行為じゃないからな。

「い、痛いです…」

足元でもぞもぞする影は、至近距離にいるはずなのに姿が確認できない。魔法を使っているのか。

「侵入者が…？」

一応確認するように言うと、影は嬉しそうに「えへへ」と言いながら立ち上がる。

「私は今から名誉あるお仕事をやるんです！ 侵入は」

なんか悠長に喋ってたので、侵入というワードが聞こえた辺りからお腹を思い切り蹴り飛ばす。

「ふ、ふふふ…。私はやれば出来る子なので、この程度では」

右足を大きく踏み込みながら、今度は相手の見えない胸元を思いつきり掴みながらその場で背負い投げをかます。バタン！と受身が取れなかったらしく影が物凄く痛そうな仕草をして倒れた。ちょっと加減してやればよかったか？

「喋ってる最中なのに…。ふ、不意打ちばかり…。もう嫌あ！
うわあああああああん！！」

俺に胸倉を掴まれたまま影は俺に必死に抗議していたのだが、途中で泣いてしまった。

…なんか、こっちが悪い事しているみたいでやりづらいな。

2

「うわあああああああん！ えぐっ。えぐうっ。どうせ、どうせ駄目な子ですもん！！」

目の前で胸倉を掴んでいる俺を放って置いて、両手で顔を隠し愚痴りながら泣き止まない影。

「…なあ。お前、本当に侵入者なのか？」

一方的に攻撃しているみたいで気が引けてきたので、俺はやや疲れ気味に尋ねてみる。

「…頼まれてっ。貴方なら出来るって。いつもは残念な貴方でも出来るはずよって」

頼んだ奴もお前の事をアホの子と思っていたのか。

「……」

もはや同情の域に達した俺が掴んだ手を離すと、鼻水交じりの涙を堪え必死にこつちを睨みながら立ち上がった。来た。

こいつ相手なら、俺の無駄だと思っていたテコンドーとか試せるかもしれないかと思ったが。非常に攻撃し辛い。

「悪いことは言わんが、引き返した方がいいと思うぞ」

「わたし。私…帰る…」

「ああ。帰った方がいい」

「…嫌。です」

「ん？」

「私は変わるんです。だから、帰らない。そして、『貴方を倒す』って任務も達成します！！」

まるで負けている主人公が吐く勝利の台詞だなと思った時には、視

界が劇的に変わっていた。

先程までしっかりと肺に入っていた空気が吐き出され、同時に自分の腹部に何かが突き刺さっているような感触。

「が。あつ！？」

痛い。という痛覚を感じてようやく初めて、理解出来た。

敵が俺の腹に向かって思いっきり殴っている事を。そして、それは余裕を持って一瞬余所見をした結果が故という事を。

「く、そ。しまった余所見して」

「らあああああああああああああ！！」

喋る間も何かをする暇もなく、振り落とされながら俺は雑巾のように廊下の奥へと投げ捨てられた。

「はつが。はあつ。はああつ！！」

唐突に襲われた吐き気と、どうしようもないくらいに酸素を吸いたという本能が互いにせめぎ合い混ざり脳を掻き混ぜる。痛みは、二の次だった。

「魔法をつ。使うしか…」

まさか本当にあの影が言うように、不意打ちだからこそ今までは弱く感じていた。だが、影が本気で攻めてくればこうだ。

眼がいい事と、多少はもどき格闘技なんかが出来る俺とでは。あまりにも大きすぎる実力の差がある。

「くそ。頭が良かったりしたら使える魔法のレパートリーも多いん

だが…」

魔法は想像で一見誰もが出来そうに感じるが、やはり単純な魔法にも位置づけがあった。

例えば同じ、相手を回復させる魔法なんかでも。単体なのか複数なのかでも難易度も魔力の消費量も違う。

比較的一般人な俺は、簡易的な回復や自身の能力強化。最弱レベルの攻撃魔法しか使えない。

「…！？」

俺が使う魔法を想像していた時、気づいた。

「ま、りよくが削られている…！？」

「貰いましたあああああああ！！」

右手を突き出し飛び込んでくる影の姿が、俺のちよつと他人とは違う視界内に入った。そう、スローモーションに見える眼の。

ゆっくりと空中を泳いでいるようにすら見える影。俺はそれ以上に遅い足を前に突き出し。

「うおおおおおおおおおお！！」

そのまま影の体が俺を越えて行くように、少しだけ腰を浮かしながら更に廊下の奥へと蹴り飛ばした。

「きゃあああああ！！」と驚くような声が響いてきたが、そんな事よりもだ。

「はあ…、はあ。なんで、魔力が…」

ふらふらと芯の力がない体で廊下の壁に手を置きながら立ち上がり、再び手のひらを見つめながら魔法を想像してみるも。

「効果が、ない…か」

魔力が無くなった原因に、十中八九影の攻撃が関与している。もしもそう仮定するならば、影の攻撃を喰らったらアウトだ。

「魔力が。殆どないお陰で。意識がしつかりしない…」

よく魔力と命は一緒だとか言われるが、実際には少し違う。確かに魔力の底が尽きてしまったら命に関わりがあるだけで直結はしない。だがそれでも、やはり魔力の損失は命に関係する。特にこう弱っている状態では。

とりあえず俺の手には負えない敵だった、逃げた方が得策だろう。俺は階段がすぐ近くにあったのでそこから降りようとした。

「!? しま」

足を滑らせる。

意識の混濁。魔力の低下。敵との交戦による負傷。様々な要因が重なって。俺は。

階段の中央部分に頭から突っ込み、強打して何度か転がりながら倒れた。

ゴリユ。と朦朧な意識でも分かる。頭蓋が割れた嫌な音が響く。それでも、首を痛めて即死に至らなかっただけ運は良かったと考えよう。

恐らく割れた場所から、赤色の絵の具に見える血が零れていく感じ

がした。

「わ、わああああああ！　だ、大丈夫ですかあ！？」

聞き覚えのある。というかさっき聞いたばかりの影の声が後ろから聞こえた。

「た、倒せとは言いましたが、人、死ぬのはただただ駄目です！」

タンタンタン。と勢いの良い音が階段に響き、地面が少し揺れる感じがする。

「わ、わ。私も魔力が殆どない。ど、どどどどうしよう！？」

とりあえず落ち着け。と声に出しているはずなのに、声として外に出せない。

「そうだ、こうすれば…！」

影の温かみのある手が背中に当たったと思えば、頭部辺りに血が集まって再構成される気持ち悪さを感じた。それと同時に、魔力が減少していくのが分かる。

「ぎりぎりまで貰って…、よし、ここまで回復させれば…」

背中にあった手がどけられると、「ごめんなさい！！」とだけ言って影の気配が消えた。

「…。…。こえは、なんとか…か」

立ち上がったたり動いたりする事は出来ないが、先程まで出せなかった声も出せるようになってきている。

頭のとっぺんにあったどろりとした液体が零れる嫌な感触も、少なくなっていた。

それでも血が未だ出てきているのは分かるので、恐らく応急処置手当てぐらいしかなくていいだろう。

「だれか…来るのを、待つしかないな…」

今更にして床がかなりひんやりとしていることに気づきつつ、独り言を呟く。

そして安堵からなのか失血からなのか怪我からなのか、意識が徐々に遠くなっていくのが分かった。視界は伴^{ともな}ってぼんやりとしていき、眠るように瞳は落ちていく。

「ま、真人！？」

半ば飛びかけていた意識の片隅、誰かの声が響く。聞き覚えのある声だが、もはや考えることは出来ない。

「ま」

急いで近寄ってきたらしい声の人物は、途中で口を塞ぎこんだらしい。代わりに息を呑む音だけが聞こえた。

「い、やあああああああああああああああああ！！」

朦朧とした意識でも分かる程、耳を塞ぎたくなるぐらいの階段に響いた絶叫。

「嫌よ！ 嫌あ！ 嫌嫌嫌嫌ああああああああああ
あ！！」

小刻みに階段を走り下りてくる足音と、泣きじゃくるような叫び声。

「真人、この怪我。どうして、誰が！？ 誰が！？」

影とは違った温かみのある感触が、またしても背中越しに感じる。

「治つて。お願いよ！！ 嫌あ！ 嫌よ、また一人ぼっち！！ 真人だけなのに！！！！」

言葉を途切れ途切れにさせ、ぽたぽたと背中に涙を落としながら。
俺の怪我を治しているらしい。

「ま、こと…？ 真人。真人。ねえ、起きてよ。起きてよお！！
真人お！！」

怪我をしている事を気にしてか、大きく揺らすのではなく小さく抓る様に服を掴みながら揺らしてきた。

対して誰かの行為も空しく、俺には波のような大きな眠気が襲ってきて、意識が切れ始める。

完全に意識が途絶える寸前に、それは聞こえた。

「寂しいよ…。寂しい」

切れた。

Episode：7「寂しがりな魔王」

「…ん」

心地良い風と肌触りのよい洗い立てのような毛布の感触とともに目が覚めた。目だけを動かしながら辺りを見渡してみると簡易型のベッドがいくつか並んでおり、どれも俺が被っている物と同じシーツや毛布なのだが、これ以上にふわふわしているように見える。それにしてもおかしい、確か俺は侵入者と戦っていたはずなんだが…。

「侵入者…？」

改めてふと浮かび上がった単語を呟き、激流のように映像が脳味噌から溢れ出て来て全てを思い出してしまった。妹の桜が襲われた事、侵入者が妙な力を持っている上に強く

太刀打ちが出来なかった事、そして、恥ずかしい事に魔力を失った俺は朦朧もうちゅうとした意識で階段を踏み外し、大怪我をした事を。

ゆっくりと上半身だけを起こしながら、どくんどくと青緑の血管が浮かぶ手のひらを見つめる。そこにはいたって健康の証拠があった。

「そつえば、桜は…」

侵入者に魔法によって攻撃され、意識を失っていたのかまでは確認できなかったのだが。桜は大丈夫なのだろうか。

「おう、桜ちゃんなら大丈夫だぞ」

独り言のつもりで呟いたのだが、辺りを見渡したときにはいなかった知り合いの人物に反応された。声のした方向へ振り向いてみれば、ツンツンとした若干ワックスで固めてある茶髪の青年こと気丈がいつの間にか立っている。

「そうか、良かった。気丈がそういうなら大丈夫だろうな」
「さっきまでお前の看護が出来るぐらいにはな」

人差し指で指し示して来たので、そちらの方向を見てみれば白いプラスチック製の桶と縁に掛けられた白いタオル。

「ま、たった半日程度だから気にする事はねえさ」

両腕を組みながら、優しく微笑む気丈。悪いが女の子なら嬉しいんだが、例え親友といえども男は嫌だ。

「それにしても、俺は階段を転んで少なくとも頭蓋骨にひびが入るほどの傷を負ったはずなんだが。誰が治したんだ？ 学校の保険医か？」

「あー、それはだな…」

何故か。どんな場面においてもストレートな物言いをする気丈が言葉に濁らせた。らしくない。

「まあいいか、お前にも関係のある話だしな」

隣のベッドに向かい合うように座り込み、「うおつ、柔らけー」と良く分からない感嘆の声を洩らした後に、続きを喋り始める。

「お前の怪我を治したのは魔気だ」

やはりそうか。あの時薄れていた意識では判断が付かなかったが、ハッキリとした判別の出来る今なら分かる。あの声は魔氣の声だった。

「当時生徒会の仕事で勇氣と魔氣。途上ちゃんとお前とで互いにグループを作って学校内を警備していた」

「ああ」

「で、偶然居合わせた桜ちゃんと合流した直後。侵入者に襲われた」
「そうだな、侵入者は魔法が何かを使っていたのかは知らないが、終始姿は確認出来なかった」

「途上に気絶した桜ちゃんを任せ、一人でお前は戦ったんだろ？」
「負けたけどな」

「という事はあれか、敵の攻撃で階段に落とされたりしたのか？」

「いや違う。俺が転んだ」

「は？」

「転んだんだよ。情けない事に」

「そうか、そりゃ運がなかったな」

少しばかりの沈黙。ここいらで深追いしてこない辺りが、氣丈の良い所であり悪いところだった。

「それと敵は変な攻撃をしていたな。侵入者に攻撃された後に魔法を使おうとしたんだが、魔力を削られていた」

「魔力を削る。なんだそりゃ」

「知らん。お陰で限界まで魔力を失った」

「ああ、それでか。まあこの話は置いておいて。お前が階段の中央部分で頭頂部から大量の血を撒き散らしていたらしくてな、偶然魔氣がそこに居合わせたらしい」

「魔氣が…」

途上から連絡を受けたのか、単純に見回り場所が被って偶然見つけてしまったのか。それとも他の経緯か。

「怪我をしているお前を治そうと魔法を使って治したらいいんだが。問題なのはここからだ」

「問題？」

「お前が気絶して意識を失ったのを、死んでしまったと魔気が勘違いしたんだよ」

「待て、仮にでもあの魔気が間違える訳がないだろう。あいつは天才だぞ？」

「冷静な判断が出来るほど、魔気は感情を抑えられなかったんだろ。なにしろさつきまで元気に話していた奴が血まみれで倒れているのを見ちまったらな」

「……！」

「俺が説明できるのはここまでだな。後は寮にいる瀬名さんにでも聞いてくれ、俺はこれから一仕事やる必要がある」

最初に座った時や動いた時には鳴らなかったはずの、ベッドの軋みきしみ音をたてながら立ち上がる気丈。

「……魔気は、お前次第だからな」

後姿を見せながら、普段出さないやけに威圧感の籠った声を俺に残して立ち去った。

魔気。お前に何があったんだ？

気丈に言われるがままに、俺はいつもの制服姿のまま学校を出て寮へと足早に向かった。いつも通りの道のり、変化のない日常。だが、胸騒ぎのような物が収まらない。

全自動のドアを入れて行くとすぐさまカウンターらしき場所に辿り着く、そこでは椅子に座った普段着となっている白い割烹着を着ながら瀬名さんがお茶を啜^{すす}っていた。ずっと見ていたいほど素晴らしい光景なのだが、俺は迷わず一直線に瀬名さんの方へ歩いていく。

「あらー？ 新崎さんどうなさいましたー？」

こちらに気づいた途端、持っていた湯飲みを手前のカウンターへと置き笑顔を向けてくれる。

「魔氣に何かあったんですか？」

逸る気持ちを抑え、ゆっくりと一言一言を伝えると、瀬名さんはすぐさま理解してくれた。

「待ってて下さいねえ。よいしょっと」

何やらカウンターのこちらからは見えない内側部分を漁っていたかと思うと、銀色に光る鍵を取り出して来る。何に使うのかと思ったら、出てきた時にカウンターに鍵を閉めていた。

「それでは行きましょうかー」

「え？ は、話…」

「レッツゴー！」

意気揚々とはぐらかされ、強制的に腕を掴まれて辿り着いたのは、数分前に出たばかりの学校内部。といっても生徒達がいる階層よりも更に深い場所だ。

そして俺はというと、着くまでのゆったりとした時間と合間での瀬名さんとの会話によって俺は大分皮肉を言えるくらいには冷静になっていた。

「……こんなとこ、初めて入りましたよ」

「はい。なんといつてもつい最近出来ましたからー」

また最近増設したのか、どこからそんな資金が出てくるのやら。

「大分広いですね、地下全部でも使ってるんですか？」

「確か敷地内全部だったと思いますよー」

あの馬鹿でかい学校と広場とエクストラを足した広さを使っているのか。半端ではない広さだ。例えるなら東京ドーム三個分ぐらいだろうか？ 実際の規模も数も知らんが。

そこは学校の体育館をさらにそのまま拡大したかのような半端でない大きさで、高すぎる天井のライトだけでは補えない事が分かってるからか、壁の側面など暗くならないようにライトが取り付けられ創意工夫されているのが素人の俺でも分かった。床は木の板が隙間なく張られており、ワックスでもかけたのかライトによって反射して眩しい。

「淳^{すなお}さん、ご飯持って来ましたよー！」

両手を口の周りに囲いまるでそこにメガホンがあるかのような構えをしながら、中央でぽつんと立っているように見える何かに向かって叫んだ。瀬名さんが「あなた」と言う事はあそこに見えるのは魔王か。そしてさすがにこの距離で声は届かないんじゃないでしょうか、瀬名さん。

「おうー！　ありがとなー！　ついでにお前も食べたいぞー！」

届くのか。そしてさりげなく下ネタを返してきやがった。

「淳さんつたら…」

横を見れば、さきほどまで口元にあった手を頬に置き、顔を桜色に染めながら瀬名さんは照れ始めた。……。あー、なんともいえん。帰りたくなって来た。

「おう、新崎クン久しぶりだな！」

未だ照れている瀬名さんと共になんと五分もかかって魔王がいる所に辿り着くと、まるで友達に話しかけているかのように話しかけられる。

服は何やら所どころが破れている黒装束で、例えば悪いが黒いゴミ袋をカッターか何かで切り裂けばこうなりそうだ。

「魔気の件で来ました」

とりあえず関係のない話に持ち込まれるのが目に見えていたので、

素早く答えると。魔王は依然笑い顔のまま。

「魔気ならここだ」

自らの背に向かって親指で指す。

そこには先程までというか今この瞬間指し示されるまで見えてなかったはずの。涙を流しながらドス黒い羽のような物を伸ばし空に浮いている魔気がいた。

「…！？」

「時を止める魔法を使ってるから動けないけどな」

思わず、息を呑む。確かに空中に固定された魔気は微動だにしないのだが、今この瞬間にでも動きそうにすら思えた。

同時に魔気のはずなのに、魔気じゃないとも思える。

無愛想にはしているものの感情豊かだった表情は消し殺され、此の世の終わりを見ているかのような悲しみに満ち涙を流すらしくない顔。

確かに初めて会う人物からは不気味に思えるであろう黒き髪。俺からすれば色とりどりの心を混ぜた綺麗な色をした髪は、空気と混ざり黒く黒くただ黒く、今見ている俺の心すら掴み取り逃がさないような妖艶ようえんさを見せていた。

「あまり魔気を見すぎるな。お前程度だと直ぐに『魅せられて』戻って来れなくなるぞ」

いつの間にか地面にあぐらを組みながら座り、煙草を吸っている魔王に止められたが、俺はすぐには目を背けられずにいた。拳をひたすら無駄だと知りつつ強く握る。

「魔気…お前、どうしたんだ？」

呟いてみるが、当の話しかけられた本人はピクリともしない。このどうしようもない感じ。あの事件と同じだ、一昨年に起きた誘拐事件。あの時も俺は近くにいながら無力だった。

すると感傷に浸っていた俺に、魔王が話しかけて来る。

「どこまで話は聞いているんだ」

「…、魔気が俺を助けに来て勘違いをした所までは」

「そうか。なら続きを話すぞ」

俺がその場に座り込むと、魔王は持っていた煙草を後ろの方へと投げる。投げられた煙草は空気中で激しく燃え、少しの灰すら残さず消えた。そして魔王はこちらを見据えて続ける。

「魔気はお前が助かってないと勘違いして、心を暴走させてしまった。結果、魔気は『魔王の血』に屈服し乗っ取られた」

「魔王の血…？」

「そのまんまだ、俺達魔王一族に代々引き継がれている呪われている血の事を指す。自身の心をコントロール出来ず、更に憎悪や殺意なんかの負の感情が高ぶっている時に、血自らが精神ごと乗っ取りに来る。正確に言くと血に込められた初代の精神なんだが、乗っ取られた奴は世界を壊そうと暴走する。一般的に知られている魔王のようにな。」

「という事は魔気も…」

「魔気だけじゃない。過去の魔王も何人かは血に乗っ取られて暴走している。俺の祖父なんかも乗っ取られているぞ」

「それを討伐するのが私達勇者の役割なんですけどねー」

瀬名さんが話に割り込みながら、俺と魔王にそれぞれ中央部分から湯気が立っている湯飲みを渡してくれた。熱い熱い熱い、下の部分を持っているんだが熱い。

ズズズ。と熱いのに飲んでしまいたくなり飲んで口の中を火傷した後、俺は魔王に質問をした。

「元に戻らないんですか？」

「無理だ。色々と手段を試したらしいがどれも駄目だったらしい。そして、暴走を止められる手段は今も昔も一つだけだ」

まで、そうすると。さっき瀬名さんが言っていた…。

「勇者が魔王を殺すしかない」

2

ある所に神様がいました。神様は全知全能だったのでなんでも作れました。ある時神様はなんとなく世界をつくってみました。

川や、海や、空や、雲や、木や、土やいろいろなものをつかって世界を作ってみました。けれど世界だけだったので、神様はふたりニンゲンを作りました。

くろいかみの子と、きいろいかみの子を生み出しました。ふたりともあたまが良かったので神様のしゃべることはも理解してすぐになかよくなりました。

きいろいかみの子はあたたかく太陽のひざしがあたるところが好きで、そとであそぶのがだいすきでした。

くろいかみの子はひえていてまっくらなところが好きで、どちらかというとなかであそぶのがだいすきでした。

次に神様は、まずきいろいかみの子のいるあかるいところが好きな動物をたくさんつくってあげました。

きいろいかみのこはおよろこびして、いつまでもいつまでもそとで遊び続けました。

けれどくろいかみの子には、いつまでたっても動物をつくってもらえませんでした。そしてもうひとりの友達はあるところばかりにいてあそんでくれません。

くろいかみの子は、ずっとずっとひとりぼっちで遊び続けました。

何千年何万年と一人ぼっちで遊び続けました。神様はいつまで経っても黒い髪の子には動物を作ってくれません。黄色の髪の子はたまに遊びに来てくれますが、いつも一緒にはいてくれません。

やがて、黒い髪の子は寂しさのあまり自分を恨み始めました。ああ、なんで私は暗いところが好きなんだろう。と。

外で遊べばいい話だったのですが、なんとも言い難い気持ちが溢れ出て邪魔して来ます。ですから一度として外に出ていません。

それから何年と経った日、明るいところが好きだったはずの動物達の一部が、暗いところにもやってくるようになりました。

黒い髪の子は、それはもう喜んですぐに友達になったのですが、芽生えてしまった自分への憎悪が消える事はありませんでした。

血を、呪い続けました。

ああ自分は何て勇気がないんだろう。と。

やがて黒い髪の子と動物達の間には子供が生まれました。子供が成長して大人になった後、外へ出て行き国を作っていきました。丁度その頃同じように黄色の髪の子とその子供も成長し国を作り始めていました。

ただ、黒い髪の子はいつまでたってもそこを出る事はなかったそうです。

いつまでも。

3

「魔気を…、殺すって言うのか。娘だろ！？」

思わず地面から立ち上がり、気楽に話す魔王が着ている黒装束の襟元らしき所を掴み上げようとしたのだが。

「必要ならな」

軽くトン。と叩かれた程度だったはずなのに、殴られたかのように腕が思い切り後ろに吹き飛んだ。あやうく変な方向へ曲がってしま

いそうになる。

「話を聞け、殺すと言ってもあくまで最終手段であって今すぐ実行するわけじゃない。本当に魔氣を助けたいなら、一呼吸しろ」

魔王に示唆しそされ俺は軽く未だ残る手首の痛みを堪えながら、一旦は考えるのをやめた。落ち着いて状況が変わるかどうかは分からないが。

「よし、いいな。まず魔氣を含めた魔王の家系は絶対に普通の方法では殺すことは出来ない。それはなんとなく昔からの馴染みだから知っているだろう？」

「『絶対結界』……」

「そうだ。俺達魔王は魔力があまりにも多すぎるが故に、あまつた魔力を使つて無意識の内に他の魔法を持続的に使っている。それが絶対結界だ。

あれは如何なる攻撃も魔力も干渉を受けず、更に本人の意思によつて自在に触れられる許容レベルも変えられる。欠点といえば自身の周りに張る事ぐらいしか出来ない事なんだが。もう一つ、欠点がある」

「それがさっきの殺す方法ですか」

「厳密に答えるなら、勇者が伝説の剣を仲介して殺す事だ。それ以外には欠点という欠点はない」

非道の限りを尽くす魔王を伝説の剣を使つて殺す勇者。まるでどこかの御伽噺おとぎばなしかゲームを聞いているかのようなありがちな方法だ。

「あの剣なら今、精霊さん達に預けてますがー」

思い出したように呟く瀬名さん、そして出てきた『精霊』という聞

きなれない単語。忘れていたが、というかこっちにこの人達が住み慣れすぎて今更思い出した。

魔王や瀬名さんを含めた魔法学校設立者は、こちらの世界の住人ではない。

俗に日本政府が名づけた、『異界』と呼ばれる次元の違う世界からやってきた住人達なのだ。魔法や魔王や勇者は子供でも知っているくらいに当たり前らしい。

らしいという曖昧な言い方なのも、実はそちらの話を聞く機会はあるにはあったものの、実際に行く必要がなかったので聞かなかったからなのだが。

「そこでだ新崎。お前に頼みたいことがある」

そしてここで『異界』の話が出るという事は。

「勇気と一緒に行ってくれ」

「すいませんが、私は今から一人で行きます」

俺が賛否を決めるはずだったのだが、綺麗で透き通った声の一つ、後ろから話に割り込んで来た。

「新崎。貴方はこちらの世界で待っていて下さい。これは魔^{わたし}気の問題なので、私が片付けなければならない事です」

魔王の後ろ側から歩いてくる人影が一つ。そいつは。

凜とした態度。誰とも馴れ合うつもりも正義を理解してもらおう必要すらないかのように思える黄色の瞳。自身の正義だけを信じ続けるような真っ直ぐ伸びた髪を、ポニテとして一つの束にまとめている奴。

「勇気…！」

元は勇魔という一つの人物で、魔気ともう一人の片割れである人物。真面目極まりなく勇魔の世間体を引き継いだような奴だ。俺が立ち上がりつつ睨みつけるかのように勇気を見つめる。しかしポニテが揺れただけで表情に変化はなかった。

「血を求め破壊と殺戮^{さつりく}に走る前に、私が魔気を片付けます」
「だからって今行く必要はないだろ…」

すると勇気は俺を非難するかのような、厳しい目付きを僅かに見せながら答えた。

「そうですか。なら魔王を見てください。あれを見た後でも貴方は同じ台詞が言えますか？」

「あの人は今関係」

ばたつ。と鈍い音が広すぎる室内のせいで響かず一瞬しか聞こえなかったが。確かに俺の近くからした。

反射的に音のしたほうへ顔を向けてみると、体中に汗を掻きながら地面に倒れている魔王の姿が見える。

「！？」

「忘れたのですか。魔法は魔力を消費して発現する事が出来、難易が高いほど大量の魔力が必要となります。つまり『時空魔法』なんて高位すぎる魔法を使って魔力が尽きないはずがないのです。今の今まで無理をしているんですよ、魔王は」

「魔王…」

倒れた魔王を見てみると、急いで瀬名さんがそこに走ってきて手を背中に置いた。

「淳さんっ、魔力ですよ！」

「あのようにしてお母さんが魔力供給を定期的に行い、なんとか元に戻ってはを繰り返していますが、半年持てばいい方でしょう」

俺には何も見えないが、勇気が言うように瀬名さんは手を背に置き魔王に魔力を供給しているのだろう。

「このままでは二人が倒れてしまうのは目に見えています。そしてこれは元はといえば私が原因なのですから、貴方は関わらなくていいです、私一人が片付けます」

言いたい事を全て俺に伝え、覚悟が出来たのかそこで勇気はくるりと半回転して、この室内を出て行こうとした。

「待て」

それを、勇気の右手首を掴み引き止める。

「それなら俺も原因の一つだ。付いていく」

「断ります」

「これは俺の意思だ、断られても俺は絶対に付いていくぞ」

「…そうですか、なら交渉の余地はないと。私が武力を使ってもいいのだと判断しているんですね」

「変わらん」

直後。俺の脇腹に向かって勇気がどこで手に入れたのかは知らないが、左手を使い刀の鞘の部分だけで殴ろうとしていた。

だがそれすらも俺の眼では『見える』。普通の人なら見えないような超高速の攻撃も一瞬にしてスローモーションへと早変わりする。
捻^{ひね}るようにして避けると、今度は勇気が掴んでいる手を強引に払い、距離を取った。

「そうでした。貴方には厄介な『眼』がありましたね」

「最低限でも無差別にスローモーションにするから、小さい頃は慣れなかった上に恨みさえしたぜ。今初めてこれがあって良かったと思えたな」

「最低スペックでスローモーションですか、昔から思っていましたがおかしなスペック具合ですね」

「本気を出せば『止まる』けどな」

勇気は「そうですか」と端的に答え。

「なら本気を出させる前に片を付ける必要がありますね」

『魔法』を使った。

戦いの幕は数分どころか、瞬きを数回する程度で終わった。本気となった勇気の全身全力の攻撃と『魔法』の両方をいっぺんに受けたから当然なのだが。

「……」

口の中は血がどろどろと溢れ、皮でも剥けたのか剥きだしにされた神経が嫌に痛い。床にへばり付いてる体はとてつもなくずたばろになっていて、凍らされたかのように指一本として動かなかった。

「ここで暫く寝ていてください」

首を上げる事も出来ないので、足ぐらいしか見えない。まさしく秒殺を行った勇気は俺に告げると、再び出口の方へと足を動かした。

「待て。よ」

だが、俺は立ち上がる。筋肉なんて格闘やスポーツを軽くやる程度にしか付いていない足を使い、今にも折れてしまいそうな両手を使って。意識を朦朧とさせながらだ。

俺の様子と異変に気づいた勇気が一瞬だけ素で驚き、そしてどうして立ち上がれない体で立ち上がれるのか。というありえない事実のカラクリをすぐさま理解し顔を顰める。

「新崎…、貴方は、何という事をしているのですか…!!」

「悪いな…、今からやるのは戦いじゃないぞ…」

「『魔法』を使って無理矢理怪我を治して、補強した上で立ち上がるなんて、正気じゃないですよ…！　ただでさえ弱っている状態で魔力を削ったら…！」

暗示的に、魔法を酷使し続ければいずれ魔力も底を付いて『死ぬ』と伝えてきてくれているが。俺には確証が合った。

「さっき言っただろ…、これは…、戦いじゃないって、な。卑怯で姑息な手を使って、俺は俺の命を賭けて挑む…。だがお前は、優しいから、殺せない…」

優しい。という言葉に勇氣は明らかな嫌悪を見せて、それを否定する言葉で吼える。

「ッ！！　つまり、私が貴方を殺せないと鷹たかをくくを括っているのですか…。勘違いしないで下さい、私は貴方をいつだって殺せます。そこに世界の命運とお父さんとお母さんの命が懸かっているのなら…！」

吐き出した言葉が嘘じゃないことを示すかのように、止めていた鞘での攻撃を開始し、俺は抵抗する事すら出来ず痛めつけられた。衝撃や斬ったりする一撃必殺でなく、あくまで体を使い物にならなくする為の攻撃。

「が…、あ…っ！」

ボキ。という不快な音と共に右足の太ももの骨が鞘によって折れ、青紫に腫れあがった。電撃が走るような痛みが背筋を駆け上がり、遅れるようにして鈍い痛みが広がっていく。

「くっう、おおおおおおお！！！」

俺は気合だけで飛びそうになる意識を引き留め、今度は回復魔法を使い強引に骨と骨を繋ぎ合わせた。すると今度は別の問題が浮かび

上がる。

先程はただ立つだけなら辛うじて出来ていたのだが、魔力が更に消費されて血が足りず体が痛めつけられている所に、意識の刈り取りという最悪な症状が相乗。それによりまるで動きに動くボールの上に乗っているかのような感覚に襲われたのだ。

「…やめてください、本当に死にますよ！」

勇気は一切変わらず不動だった表情は水面のように今や揺らぎ、虚偽によって覆い隠し守らないといけないほど弱くなっていた。言葉に伴って攻撃も止められる。

その様子を見た俺は確信した、こいつにはやっぱり無理だ。薄く笑いながら喋る俺ですら辛うじて聞き取れるほど小さな声で呟く。

「は、は…。見殺しに…。出来ない。お前は優しいから、無理だ…」

「…そんな事！」

「あるさ…。だってな。お前、…別に俺を今ここで倒す必要は、ない。無視すりゃ…。いい話さ…。だが、お前は…こうして俺、と戦っている…」

俺の言いたい事が分かったのか、明らかに不貞腐れたような顔をして眼を逸らした。

「…、別に、深い理由なんてありません」

「嘘だな…。ここで俺、と戦う意味は…。俺に、魔気を諦めて、…欲しいから。…だ。心を折って、…しまえば。後で魔気が、…いなくなっても。…傷は少なくて済む」

「……」

「優しいよ。…お前は、やっぱり勇魔…。だもんな。ほんととは…魔

気を、殺したくたって…、ないはずだ」

核心を突いた一言に、勇氣は顔をこれ以上にないくらいに弱弱しく、後少し押せば折れてしまいそうな表情をした後。

「私は…」

突然俯うつむいて。

「…助かる方法が、ないならどうすればいいんですか…！」

大粒の涙を零しながら、制服のスカートを思い切り両手で握って叫んだ。

「…私は元の体で勇者の血を、魂を多く引き継いでしまった方だから、正義を全うするしか出来ないんですよ…！ ゲームのように、優しさや愛に溢れている訳じゃない！ 私は頑固で正しいと思った事を直進する事ぐらいしか出来なくて、…こんな時でも、私は魔気を殺す事ぐらいしか、出来なくてっ…！」

勇氣は泣きながら喚わめく様に叫び続ける。

そんなあいつの心の奥底に溜まっていた言葉を聞いた俺はかという、と、笑っていた。何故かって？ まだ分裂して一週間程度しか経っていないが、勇氣は他人と深く関わりとうとしなかった。一定の距離を保ちつつ、一人で全てをこなそうと奮闘し、弱弱しい女の子の両肩で重く辛い荷物を抱え込んでいた。だから頼られて、素直に嬉しいと思えるんだよ。

例え勇者という主人公に位置づけられた奴だって、コンプレックスはあるもんだ。

「ついでに。…家族思いで、優しくて、信じることを。…曲げず、自分が間違った。…時には。ちゃんと気づける奴。…だな」

「…っ！！」

「勇気。…、助けられる。きっと。…助けられるさ。…だから諦めずに」

俺は真っ直ぐ勇気の元へ歩いていき、途中途中を曲がったり斜めに進んだりしながら辿り着く。そして手を差し伸べた。こいつを止められるのはここしかない。

「助けられる…、方法を探そう。俺も手伝う…！」

勇気は差し伸べられた手を見るなり、あれだけ強く張りに張った虚^{きょ}栄^{えい}の仮面が壊れるかのようにぼろぼろと涙を溢れ出させた。通った所は線となり、宝石が散りばめられているかのように輝く。孤独に立ち上がっていた少女の表情は、今別の物へと変わりつつある。

「筋書き通りのように上手く行く訳がないじゃないですか…、子供だって魔王は倒されるべき存在だって分かります…」

「都合良く…、進む訳が無い、と思うさ。だが俺も魔気を、助けたい、と思うから…。行きたいんだよ…」

すると、勇気は涙を流しながら俺を睨みつけ。

「…私の、負けです。真人」

硬い表情を解^{ほぐ}し苦々しく笑って、俺の差し出した手を強く握り返してきた。そこに込められていたのは弱く薄い決意だったが、それでもいい。

「よし、それな」

全てが丸く収まり上手く行ったので、調子付いた俺は普段低い気分を無理に上げながら締めようとしたのだが。

「きゅう」

急に足の力が無くなり、視界がぐにやりと屈折した鏡に映ったかのように螺子曲ねじまがったかと思えば、後ろ向きに倒れた。

「真人！？ あ、貴方自分の体の限界を考えていなかったのですか！？」

そんな勇気の声が最後に遠のく意識の中間こえた気がする。
やはり俺は勇気のような主人公タイプの特別な人間ではなく、格好良く締める事も出来ない一般人だった。

- Episode : 8 「準備」 -

眼が覚めると最初に視界に入ったのは白い天井だった。という事は俺は保健室にいるのか。

「おー、新崎。気がついたかー」

能天気な親友の声が聞こえてきたので、首だけ動かし声の主を探してみる。

「よっ」

右手だけ軽々しく上げ、年中笑っているようにしか思えない笑顔をこちらに向けながら、気丈はまたしても向かい側に座っている。

「また保健室送りか。ははは、無茶するよなー、お前も」

「少し揉めたからな」

「揉めた…か。魔気に関して勇氣とだろ？ お前も大概凄いやつだな、恐れ入るぜ。だってそこまで尽くせる奴なんて、世界中探しても両手で数える程度だろうしな」

「……」

「…それと、あまり無茶しすぎるなよ。俺はこれでもお前の親友のつもりだから、無理だと思ったら頼れ」

「ああ、分かってる」

苦々しく伏せた笑みで「そうか」と答える気丈。昔からこいつは本人が拒否の意思を示せば深入りしないが、それでも心配するような奴だった。

「お前、これから『異界』に行く事になるんだろ？」

「そうだが」

「すまん、俺達も付いて行きたいのは山々だけどよ…、桜ちゃんは生徒会長だから無理だし俺は…」

「いざという時桜の傍を守るのはお前だけだからな」

そこで再び「悪いな…」と申し訳なさそうな顔をして、次にもの寂しそうな表情をしたかと思った。んだが…。

「ところでさっき話を魔王さんから聞いたんだが、お前ダサい倒れ方したらしいな！」

いつものニヤけ顔と悪ノリを決めてきやがった。おいおい、さっきの辛気臭いあの空気はどうしたんだ。まったくこいつは…。

「……」

「お、おーい。ガン無視されるとなんか俺寂しくて死んじゃうぞー？ いや、すいません。マジで独り言喋ってるみたいで悲しくなってくるから無視しないで下さい、お願いします。ただ空気を変えたかったっていう出来心でやってしまっただけです…」

「ん、何だ気丈。貴様も来ていたのか」

そんななんとも居心地の悪い空気を破るかのように保健室に入ってきたのは、誰構わず貴様と呼び捨てるジャージ姿の酔っ払いだった。つまり師匠と俺が呼んでいる人なのだが。

「私と弟子とのイチヤイチヤする時間を邪魔しよって、いや、待てよ。貴様も混ざってみるか？」

「いや、遠慮しておきますよ。これから用事があるんで、貴方との

つきあいはまた今度でお願いします」

ふざけていた態度を即座に改め、軽くこちらに手を振りながら保健室を出て行った。しかし珍しく女に目がないあいつが、一切の下ネタを言わず紳士風に保健室を出て行くとは…、どっかで頭でも打ったか？

「くくくく、相変わらずのエロスだな。どさくさに紛れて下を言つてやがる」

「……、言つてたのか」

「高度なエロスだ。実は低レベルのエロスと見せかけておいて、さりとところという場面では決めてくる。するとどうだ、誰一人として真面目に話してると思つて気づかない。私の前では無駄だがな」

「気丈…」

努力の方向性が違う。それは勉強だとか上手い逃げ口だとか、…桜から逃げる時に使うものだと思うぞ。

「ところでだ、貴様の所に来たのは他でもない。貴様も『異界』に行くんだろっ？」

「そうですか」

「なら出発祝いだ、受け取れ。それは秘宝中の秘宝の剣だから大切にしろ」

師匠が手で掴みながら渡してきたのは、ごつい装飾が目立ちやけに黒光りする禍々しい剣だった。悪役とかが使う剣だろどうみてもそれ。

「その剣はなんと、魔力をいくら注いでも制限が無いと言われている」

「…いや、さすがにそれは嘘だろ」

師匠の言う『魔力を注ぐ』というのは、こういった剣などを含む『道具』を自身の体の一部と仮定した上で、道具に自身の魔力を混ぜ込ませることだ。それにより道具を中継して『魔法』を放出したりする事が出来る。

こうやって道具を使って魔法を放出する必要があるのは、自身の魔法によつての自爆を防ぐからだ。どんなに凄い魔法だとしても突然空気中に現れる訳ではない、きちんと自分の体から発現し放出される。つまりは最も願う場所から近い場所こと大抵は肌から出てきてしまう。そうすると自滅をしてしまうので、道具を中継しての道具から魔法を放出する事が一般的となっているらしい。

俺は再びやけに歪^{いびつ}な形にも見える剣を見つめた。確かに只者じゃない感じはするが、注ぐ量に制限がないは嘘だろう。邪気が溢れて俺の知らない呪術が使える、なんかだと今すぐ信じられそうだが。

「嘘だ、制限は確かにある。けれど恐らく魔力を注げる量という面でそれ以上の一品は見たことが無い」

「…それなら試しにふらつく手前まで魔力を注いで、魔法を使ってみますよ」

俺は剣を手に持ち、自身の体の一部のように思い描きながら、その上で使う魔法を想像する。すると、剣から何かが体の方に流れてくる感触と共に力がみなぎって来た。同時に、剣の持つ『許容量』の高さが理解出来る。確かにこれは師匠が推し進めするのも分かった。例えるなら、無駄にでか過ぎるデータ容量を持つパソコンみたいな感じか。

何で俺にはこんなハイスペックな物ばっかり手に入るんかね、元が

どうしようもないのにな。

ふん、どうだ。まいったか？　と言いたげに鼻息を荒げ両腕を組みながら俺を見る師匠。嘘を棚に上げて威張るところではないと思うが…。

「まあせいぜいそれでも使って死なんようにな。貴様にはいつまでも私の弟子で居て貰うつもりなのだから」

あくどい事を考えている邪悪な笑みを見せながら、気丈と同じように立ち上がり保健室を出て行った師匠。

俺は師匠の姿が消えた扉を見つめる。あの人も何だかんだ言って、俺の事を心配してくれてるな。と思ったのだが。

「ん？」

剣の鞘さやと刃の部分の隙間に、何かプラスチックの糸いとというか…。服を買った時に付いて来るネームのような物が挟まっており。書かれているのは。

『言い忘れていたが弟子。この剣に一回でも魔力を注いだら、他の『武器系の道具』には魔力を注げな

い呪いを剣に掛けられるから、気を付けておくように』

「……、誘導してたよな」

俺は今この瞬間どこかで高笑いしているだろう師匠に、試し切りをしたくなった。

とりあえず『異界』というぐらいだから、念入りに準備する事は無駄ではないと思い、寮の自分の部屋で荷物をまとめていたのだが。

「うちも行かせてくれへん!？」

先程インターホンを鳴らし部屋に入ってきていた途上が、やや白さが入り淡くなった空のような水色の髪を揺らしながら、幻聴かもしれない言葉を掛けてきた。

「…、途上。悪いが、冗談なら他でやってくれ」

「冗談なんてゆってへん、うちも『異界』に付いて行く」

「魔法も使えない…、のにか？」

「…うん」

「まあ、魔法については向こうにあるらしい『魔石』を使えばすぐ使えるから良いとして…。本当に良いのか？」

こくりと頷く途上。その瞳には強い意志が見えるが、それはどこか確固とした、というより逃げているように思える。…何かしら、理由があるのか。

「もう一度聞くぞ、向こうでは下手をすれば死ぬかもしれない。俺

達はいざって時お前を守れる保障なんてないんだぞ、本当にそれでもいいのか？」

途上は俺の『死ぬ』という言葉に少しだけ怯えの色を見せたが、引かずに再びこくりと頷いた。そこまでの事なら、追求はしないが…。

「よし、なら途上も一緒に行くか」

「え、ええの！？ そんなに簡単に決めて」

「簡単かどうかは俺の事じゃないから知らないな」

「……！ ありがとうな！」

途上が喜んだ声を出したかと思うと、俺の背中に思い切り両腕で抱きついて来た。後ろからの突然の衝撃に、俺は思わず嬉しさよりも「うつ」という呻き声が出てしまったのだが。

「真人、具合が良くなったのなら支度をし」

タイミング良く、俺が立つ直線状にある玄関から勇気が入ってきていた。

そして途上に抱き付かれている俺を見るなり、みるみるクズでも見るような冷めた目つきをして。

「…やはり私一人で行ってきます」

ガシャアアアアアアン！ と外に出ながら乱暴に扉を閉めた。なんとというタイミングの悪さ。

「すまん、少し離してくれ」

「へ？ …あ、ごめん」

勇気の行動に呆気にとられていた途上から離れ、俺はすぐさま靴を履き玄関を出る。

「勇気ーどこいつ。…っ!？」

玄関を出るなり、俺は大きく襟首を掴まれ体ごと引っ張られた。きゅーぱたん。と少し擦れる音を出しながら俺の部屋の扉が閉まる。掴んでいる方向を見れば、玄関の扉を開けると丁度死角になる場所に隠れている勇気がいた。俺はてっきり怒って遠くに行ったのか思っていたんだが。

「…どういう事ですか、さっきの事」

「さっき？」

「先程ですよ、先程。貴方が途上さんに言っていた『なら途上も一緒に行くか』とは何ですか」

「そりゃ、そのまんまだろう」

そこで勇気があー。と思い切り疲れたような溜息を尽き、頭を右手で抱えながら再び俺の顔を見る。

「私達が行く所が分かっていると言っているのですよね？」

「ああ」

「…、大切な友達なのでしょう？」

「途上がどう思っているかは知らんが、俺は少なくともそう思っている」

「それなら、何故？」

「何故って…」

「大切に思っているのならここで待たせようとは思わないのですか。大切だからこそ、待たせるべきなのではないのでしょうか」

「……」

「私は、待たせておいた方がいいと思います。もしもの時を考えるのならば…」

「いや、連れて行く。あいつは自分の意思で行きたいと言ったんだ、それ以上必要な事はない」

「…知らないですよ」

「迷惑なら俺が謝る」

「迷惑ですよ、本当に。まったく…、貴方はどこまで我侭なのか」

「すまん」

勇氣は「謝って済むのなら警察はいらないですよ…」と言いながら俺の部屋の扉を開けて、中に入っていた。俺も続けて部屋へと入る。

「あ、…ゆ、勇氣さん。こんにちは…」

先に戻ってきた勇氣を見るなり、硬直して上がっている声を出す途上。相変わらずの人見知りっぷりだな。

「貴方も付いて来るのですよね？」

質問してきた勇氣に、緊張がピークにまで達したのか。途上はトマトのように顔を真っ赤にして。

「ひゃ、ひゃい！」

一呂律の回らない声を上げる。おまけに眼まで高速に回転していた。そんな途上の様子を見た勇氣は顔を少し顰めながら。

「…あの、私はそこまで怖いのですか？」

若干落ち込んでいる。しかし途上は恐らくそんな事はないので、弁護しようとするのだが。

「ひひひひえ、しょ、しょんな事…」

噛みに噛みまくる上に焦るばかりで、余計に事態が悪化していた。

「あんな、何のコントをやってるんだ？」

「……やはり私は」

「べべべべつに焦ってませんよ!？」

膝を曲げながら床に人差し指でもじもじと何かを書き始めている勇氣と、両腕を上げながら何を弁護しているのか分からない状態の途上。

「勇氣、お前も地味に凹んでるんじゃない。途上、お前はとりあえず深呼吸でもして落ち着いてくれ」

俺は溜息を尽きながら先導する。やれやれ、こいつらを見ていたら、この先の旅が前途多難になる予感しかしなかった。

俺と途上と勇氣はとりあえず解散し、日が昇っている内に最低限必要な荷物をまとめ、夜に『門』前で集合する事となった。

けれど午前のうちからまとめ始めていた俺は、夕日が山に隠れるなとも言い難い風味を感じながら、早すぎる時間から門の前で一人待つことになってしまった。

といっても本当に目の前などという馬鹿な話ではなく、近くにある休憩所にあるベンチで、ほのぼのと辺りの風景を見ながら待っているのだが。

「…それにしても、相変わらず大きすぎるだろ」

誰に話しかける訳でもなく俺は一人呟く。だいたい門の大きさは山一個分の大きさだ、ここから一番高い所まで見上げていると首を痛めそうになる。というかそんな具体的な比喻が出来るのも、門は扉があつたりする訳ではなく、ただ枠組みとして存在しており、すぐ後ろには山が聳えているからだ。そして門を正面から覗き込んで見ると、確実に山ではない「どこか」に繋がっている穴だけが見える。

この『門』は『異界』への唯一の通行手段であり、また魔王や勇者こと瀬名さんがこちらの世界にやって来たのもこれを使つてらしい。昔からあつた訳ではなく、また無かつた頃は日本を含めて魔法の存在は一切として知られておらず、勇者や魔王などは空想上の人物だった訳らしいのだが。こちらの世界でいう大きな出来事、丁度日本を含めたアメリカ、ヨーロッパ圏と、アジア諸島の世界規模の戦争。即ち『第三次世界大戦』が今か今かと火蓋を切ろうとしていた頃に、突如として日本の首都東京の過疎地帯に『門』が出現したらしい。しかし発見された当初はまやかしかだ。などと言われて相手にされず、

そして日本政府としてもそれどころではなく、国外との戦争の体勢に明け暮れていたらしいが、門を経由してやってきた『魔王』と『勇者』の二人が一方的に交渉。そして誓約を強制的に結ばれ、ようやく『異界』の判明と『門』の存在を知る事となったらしい。

まあ、そんな教師の話を思い出すほど、俺は暇だったのだが…。

「オウ、ナンデオマエガココニイルンダ！」

隣から日本語馴れしてないように見せ掛けた言葉が聞こえた。しまった、考えてなかった。ここは『こいつ』の居場所というか拠点だったな。

「……」

「ほーう、美少女がここにいるのに無視するとは貴様いい度胸だな！ ははははっは！」

嫌々ながら隣を見てみると、どんと胸を張り女らしくない笑い方をする、迷彩服を着た兵隊姿の白銀の髪の少女がいた。というかもう一人ほどそんな変な笑い方をする人物を俺はよく知っているが。

「新崎、入学式振りね、何日ぶりだっけ。忘れたからまあいいわ」「…二週間振りぐらいだろう。それ以外の日お前は『異界』攻めをしているからな、クルト」

そう、隣にいるのは魔法学校在住の『ラ・シア・クルト』と呼ばれるロシア人であり、軍人らしい。こいつは魔法学校の魔法技術を目当てに入学してきて、当日からこの門を攻めた事によって一躍有名人となったので、同級生で知らない奴は居ない。本人は同じよ

うに軍人である父親から小隊を譲り受けており、その小隊を使つて隠すことなく堂々とこの門から『異界』を毎日一回攻めている。しかし例外として他人に迷惑を掛ける事だけは絶対にしない。という妙なポリシーを持つ絶大に変わり者だ。

その妙なポリシーのお陰で、魔王から追放される事無く今こうして攻めても、特に追求されないというのもある。

実は他にも理由もあるのだが、それはどうせこの中に入ったら嫌というほど分かるので忘れよう。

とりあえず気は進まなかったが、話しかけられたからには喋るか。

「今日の攻めは終わったのか？」

「んー、終わったよ。今日も完敗した」

「負けたのにやけに清々しいな」

「負けても楽しいからよ、それに今日で終わる訳じゃない。明日また挑戦すればいい話。貴方だってそうでしょう？」

「…そうだな、俺もどちらかというとそういうタイプだな」

「昔っからそうよね、変わらない」

「ほっとけ」

クルトが「ハハハハハハハ！」と涙を出しながら逞しい笑い声を出した。そこまで笑うか。

暫く笑っていたこいつだったが、突然固まったかと思うと笑い声を止め立ち上がる。クルトの視線の先を追って行くと、黒人にサングラスを掛けた、いかにも臭のする人がクルトに向かって手招きをしていた。

「ごめんね、隊員達と呼んでるわ」

クルトは、しーゆーあげいん。とどう聞いても片言な英語を呟いて、隊員達のいる方向へと走っていった。

そんな後姿を見ながら俺は、また一人休憩所にて待つ。しかし、あいつも昔から変わってないな。

「彼女、変わってないですね」

今度は透き通るような声が隣からしたので横をしてみる。そこにはベンチに座らず立っている勇気の姿があった。灰色のリュックサックを背負っている以外に、対して何時もの姿と変わらない。

「隣、いいですか？」

俺が頷くと、ちょこんと少しだけ距離を置きながら、勇気はベンチへと座り、それから背負っているリュックを空いているスペースに置く。

「早いな」

「越した事はないと思ったので、それと用意するのは、着替えと食料だけだったというのがあります」

勇気の話聞いた俺は思わず噴出してしまった。前半は想像出来た。しかし、そのまま後半部分まで想像してしまったのが悪かった。落ち着け、俺。

「……」

先程途上が俺に抱きついてきた時の様な、というかそれ以上に冷めた目付きで勇気はこっちを睨みつけてくる。

「い、いや。すまん。俺も健全な男なんだ、許してくれ」

「酌量しやくりょうの余地なしです。弁解は一切認めません」

「あのなあ……」

「あ、待っててくれたん！。あー……」

俺が何やら拗ねたようにも見える勇気を宥なだめていると、途上の声が割り込む。その声は最初はどこか嬉々としていたのだが、最後に一気にトーンが落ちた。勇気がいる事に気づいたからだろう。人見知りスイッチが入っている。

「……もしかして、待っていましたか？」

丁寧な言葉遣いで喋り、似非関西弁は失せて表情からも笑顔が消えていた。

「いえ、数分ほど前に来たばかりですから。気にする事はないですよ」

「……はい」

途上の上がつているようにも見えた髪の毛はゆらゆらと風に揺れ、バッグを背負う肩も竦んでいるように見える。なんだかな、こいつも早く人見知りが無くなるといいんだが……。

「それでは予定より早いですが、『異界』に行くことにしましょうか」

「そうだな」

「はい」

全員分の声を確認した勇気は置いてあったリュックを背負い、一度だけ後ろを振り向いた後に『門』の方へと歩き出す。一直線に道路

が門の入り口へと繋がり、その姿は門を潜くぐるというよりは、トンネルの中へ入っていくような感じだ。

一步。また一步と歩き進めていくごとに、暗くなる。しかし一定毎に黄色の蛍光灯ランプらしき物が両サイドで光っているので、真つ暗な場所は無かった。そして途方もないようにも見える道路を歩く間の暇を潰す為、自然と途上を初めとした会話が始まっていった。

「この道路は資材や人を運搬する為にあるんですよね」

「そうです。といっても、午前中だけで作業は強制的に中断されませんが、よく大型トラックが通ったりするので、わざわざこんな午後にしたのですが…」

「因みに関係ない話をする、こんなに詳しいのもよく小さい頃ここら辺に来たからな」

「小さい頃ですか」

「ああ、よく気の強い勇魔なんかが先陣切っていたが…」

「待つてください。それではまるで、私が男勝りしているみたいな言い方ではないですか…」

「……」

「何故黙るんですか!？」

「いや、別に。自覚が無いってのも大変だな。とだけさ」

「…真人。貴方には後でキツク言う必要がありますね」

「待て待て待て、魔氣が言うとは若干まだマシに聞こえるが、お前が言うとはマジにしか聞こえん」

「本気です」

「すまん」

「…まったく、貴方はどうしてこう捻ねくれているんですか」

勇氣がそつばを向き、溜息を尽きながら呟くと。途中から黙っていた途上は何やら右手で口元を抑えている。

「…ぷ、く。く…、くくく…」

顔を本人に気づかれぬ程度に見てみれば分かった。どうやら笑うのを堪えているらしい。…こいつもこいつで、楽しそうだな。

そんな他愛の無い話や魔法の話などをして、十数分ほど経ち始めた頃。風景が大きく変わり始めた。平坦だった壁はどこか洞穴でも入ったかのようにでこぼこと変形し、道路は凹凸や砂利の溢れる地面へと切り替わっている。

「…真人」

切羽詰まったというか、緊張感のある顔付きで俺を見る勇氣。分かっている、そろそろ『あの人』^{かまぼこ}だろう？

狭かった蒲鉾のような形をした場所は、大きくドーム状に広がった。中央を二つに線引きするかのように巨大な鉄格子が存在しており、まるで俺達のいる世界と、魔法が当たり前の世界との分かれ目のようにも思える。

「いらっしやい」

そして、『あの人』の妖艶な声が響いた。

「久しぶりねえ、新崎君と…、えーつと、誰？」

鉄格子の上に乗っていた『あの人』がぺたん。と奇妙な音を立てながら地面へと降りた。

「うーん、片方は勇魔ちゃんの面影はあるけど…、もう一人は誰かしら…。まあいいわ、新崎君に『直接聞く』方が早そうね」

「真人！！」

「……う、おおおおおおお！！？」

「に、新崎さん…！？」

『あの人』がそう呟いた直後。視点が目まぐるしく変わり、吐き気さえ覚えた。勇気の声と途上の声が途中聞こえた気がしたが、正直それどころではなくなっている。

「抵抗するわね、でも私の淫術にかかれば誰一人として最後まで抵抗できないわ」

竜巻のように荒れ吹き込む感覚の中、『あの人』の声だけがはつきりと聞こえた。いや、これは聞こえてるんじゃない。もう既に刻み込まれてる…。

「ほーらほら。よし、完了」

完了。という言葉が聞こえると同時に、つい数秒まで感じていた気持ち悪さは抜け、気だるさだけが残った。俺はその場で膝を折りな

がら両手を地面につけ、滝のように吹き出る汗と共に息を荒げる。

「だ、大丈夫ですか…っ！」

淑やかに駆け寄り、俺の背中を摩^{さす}る途上。大丈夫かと聞かれれば大丈夫じゃないんだが…、それよりも気になるのは『あの人』だ。

「貴方は、相変わらず何をやってるんですか！ お祖母さん！！」

勇気の批判する声、そして叫ばれたお祖母さんという発言。そう、俺の目の前で立つこの人は…、朝倉勇魔の祖母にして、魔王淳の母でもある『魔王クラ』だ。容姿は魔気をそのまま更に大人にさせたような感じで、…色々と成長した姿とっていいだろう。違うといえば着ている服が学校の制服ではなく、未だ見慣れない独特の服を着ている事ぐらいだろうか。

そしてクラさんは特別な魔法を使う事が出来る。本人は『淫術』と呼んでいるのだが、これが半端ではないほど厄介なのだ。まず、相手の五感を支配した後に、本体である体を無くし弱っている精神ごと乗っ取る事によって操作を行うという、この人の性格をそのまま現したような力を持っているのだ。クルトとその小隊が返り討ちに会うのも分かる。

「だって、新崎君面白いんだもん。これくらい良いじゃない、勇気ちゃん」

俺の記憶から全てを読み取った上で、大人の体で子供のようににはしゃぐクラさん。対して勇気は憤りを隠せない表情で噛み付く。

「だとしても…！！」

「はいはい、分かった分かった。で、貴方達は『異界』に行きたいんでしょう？」

「…ですから、ここを通して欲しいんです」

脳味噌に直接電気棒でも突っ込まれたかのような違和感を頭に感じつつ、俺は言葉を紡ぐ。実際にそんな体験してはいないし、したくないが。

「んふふー、その答え方素敵よお。背筋がぞくぞくしてくるわ」

本当に背筋をぶるぶるっと震わせながら頬を桜色に上気させ、恍惚の表情をするクラさん。…姿形が似ているから、まるで魔気がやっているみたいで少し目の付け所に困る。

「相変わらずの変態っぷりですね…」

「そうねえ、魔王の中では一番の変わり者って言われてるもの。ありがとう、ってそんな話じゃないわ。貴方達『異界』に行くんでしよう？」

「淳さんからは承諾を頂いてます…がつ！？」

「あの子はどうでもいいのよ。今ここで通すも通さないも私が決める事なんだから…ね？」

俺が喋っている間瞬きをした直後に目の前にいたはずのクラさんが消え、後ろから眩暈のするような強烈な匂いと感触を感じた。今の数秒にも満たない時間で後ろに移動したのかこの人は！？

「遅しいわねえ、男の人の背中って」

その上で両腕を首に絡ませ、クラさんは耳元で囁いてくる。俺は咄嗟に振り放そうとしたが、体が思ったように動かないどころか、逆

に痺れるような感情が湧き出てきた。

「ま、た…淫術を…」

「貴方達は魔法と勘違いしてるみたいだけど、まあいいわ。これもどうせ向こうに行ったら嫌でも分かるもの。それよりも、今…」

「はあああああつ！！」

俺が拘束されていると、勇気を持っている鞘をクラさんに向けて大きく振り回す。「あら危ない」とにやにやしながら雲のようにゆらりと避けた。

「嫌ねえ、ちよつとした冗談じゃない。すぐちよつかい出すと怒るんだから」

「はあ、はああつ。…それより、早くここを通してくれませんか。

貴方に関わっている一分一秒が惜しいです」

「もう。少しぐらいずっと作業ばかりしている女性に娛樂ぐらいあったっていいじゃない」

「貴方の娛樂に関わっているとロクな目に会わないからですよ…」

何か苦い物をかみ締めているかのような表情をする勇気。実は俺には心当たりがある。あれは途上に説明した俺達がここいらを探検していた頃、何度かクラさんと遊んだことがあるのだ。ただ遊びといつても子供がやるような遊びではなく、危険が伴う遊びばかりだった。しかも巧みに淫術によって『また来なくなる』心理にしていたらしく、俺達は疑問も持たずここに来ていたのだ。

「あれもちよつとした娛樂だったわよ。別に貴方達の持ってた願望を軽く弄っただけだから、無理して来るようにしてた訳じゃないのにねえ」

俺の心を淫術で読み取ったのか、こちらにウィンクをしながら笑みを見せるクラさん。その度に勇気が鬼のような形相をするのは気のせいだろうか。

「もう我慢なりません、実力行使でここを突破するまでです!!!」
「

どうやら気のせいじゃなかったらしく、完璧にぶち切れた勇気が鞘に収めていた刀を取り出し、クラさんに突撃して行った。

「この程度で我慢できないなんて、まだまだお子様ね。いいわ。私が女の手解きを見せてあげる」

クラさんは両手の平をバツ！と開いたかと思うと、突撃してくる勇気に丸腰で。

「大好き、勇気ちゃん!!!」
「

思い切り腰元から抱きしめた。

「は、はう!?!」
「

抱きつかれた本人である勇気は、呆気に取られたような声を出したかと思うと。

「あ。あ…あー」
「

そのまま先程のクラさんのように頬を桜色に染め上げ、カクン。と瞳を閉じながら人形の糸が切れたようにクラさんの肩に凭れ掛かった。
もた

「勇気！？」

「勇気さん！？」

「大丈夫。興奮してたから、眠らせただけよ」

俺と途上が急いで駆け寄ってみると確かに、すー。すー。と一定のリズムを取った呼吸をしながら眠っている。

「ここを通りたいのなら好きにするといいわ。最初からそんな事興味なかったもの」

にやり。と悪戯っぽい笑みを見せながらこちらを見るクラさん。本当に遊びでやってたのか…。

「新崎君、女の子なんだから大事にしてね」

クラさんが抱いていた勇気を解放して、こちらに渡してくる。俺は両腕を使っても勇気を持てる気がしなかったので、途上に手伝って貰いながら背負った。う、お…意外と。

「魔力分けて上げるから、魔法でも使って頑張って。重いなんて絶対思っちゃ駄目よ」

「あ…ありがとうございます」

クラさんに突然手を掴まれたかと思うと、そこから温かみのある力が伝わってくるのが分かった。

「どうして急に協力的になったんですか？」

「うふふふ。私みたいな年寄りになってくると、こう若い子を見ると弄^{いじ}りたくなるのよねえ。特にこういうムキになってくる子、孫

なのに可愛いつたらもうー」

ぷにぷにー。と言いながら勇気の頬つぺたを人差し指でつつくクラさん。その表情はどこか微笑んでおり、嬉しそうだ。

隣でその様子を見ていた途上が、何故か自分の頬つぺたを突いていた。

「鉄格子は上げておいたから、今からでも通れるわ。でももう少しだけ私と遊んでもいいのよ？」

「遠慮しておきます」

「つれないわねえ」

クラさんはうふふと笑った後、今度はひょいっ。とまるで重力を感じさせないようなジャンプをして、いつの間にか天井近くまで釣りあがっていた鉄格子に腰掛ける。ん？ 待てよ。その位置的に。

「…、新崎。あかんからな」

俺の考えていた事を逸早く読み取ったのか、横から関西弁で呟く途上。なんのことだかな、俺は分からんぞ。

「んふふふー。いいのよお、男の子なんだから、見たかったら見ちゃっても」

丁度鉄格子の下を潜り抜ける時、確信犯の嬉しそうな声が聞こえた。しかし俺は構わず歩き続ける。もしこういう時気丈がいたりしたら、人目関係なく「ま、マジですか！？ お願います！」と土下座してでも見せて貰おうとするんだろうな。

そして歩き続けドーム状の出口に差し掛かった頃。

「通してくれて、ありがとうございます」

クラさんの後姿に向かって、俺は勇気を背負いながら静かに一礼をした。すると、クラさんは後ろ向きに手を振ってくれる。

「…行こか」

立ち止まっていた俺に対して、途上が声を掛けてきたので、再び前を向き歩き出した。

…きつと、寂しかったのは本当なんだろうな。
歩きに歩き続け、やがてはクラさんの姿が見えなくなりながら、俺はそんな事を密かに思う。

「あの人、あそこでずっと仕事をし続けるん…？」

ふとこの道程に入ってからずっと黙っていた途上が、こちらを見ながら話しかけて来た。覗き込んでくる瞳はただひたすらに水色だったが、どこか深い青色が混ざっているように見える。

「そうだな、毎日だ」

「…毎日」

少しだけ俯きながら「毎日」という単語を復唱するかのように呟いて、すぐに黙る途上。…どうしたんだ？

「ん、んー！」

俺が途上を気にすると同時に、背後から背筋を伸ばすような声が上

がった。

「んー…？」

そして今度は寝惚けているんだろうな。と思う可愛らしい声。

「ままままま、真人！？ 貴方私に何をッ！？ というか何故私は真人に担がれているのですか！？」

次に上がったのは状況が理解出来、慌てふためく完全に眼が覚めた勇氣の声だった。

「落ち着け。お前はクラさんに眠らされてたんだよ」

若干動転している勇氣に言い聞かせると、途端に地味に痛かった蹴りが止む。お前は馬か…。

「すいません…、なんとなく分かりましたから、とりあえず降ろしてくださいませんか？」

「大丈夫なのか？」

「ええ」

俺が腰を下ろすと、一気に背中にかかっていた重さが消え、身が軽くなった。すると、降りた勇氣が今にも消え入りそうな声で呟く。

「…私、重くなかったですか？」

「全然」

「そ、そうですか…」

俺の回答のどこに安心する要素が合ったのかは分からないが、勇氣

はほっとしたように安堵の息を洩らした。確かにクラさんの言った通りだったけど、分かん。

「男の人である新崎さんには分からない事なんです…」

途上の言葉に、やけに納得しているような様子で勇気が頷いていた。お前ら仲良いな。

俺達は止めていた歩みを動かし、最初に比べると大分凹凸が激しくなり暗くなつた道を進む。そしてその合間に勇気に事情を説明した。

「あの人は…、まったく」

「悪気が合つてやつてる訳じゃないと思うんだがな…」

「いえ、例え優しいだろうとしても、絶対悪気はあります。確信できます」

「そこまでか…」

ま、かくいう俺もあの人の弁護をする気はないが。

「それは置いておいて、これからどうしましょうか」

「考えてなかったのか？」

「一応は考えてるには考えていますが、あくまで大体なので」

「そうか、ならその時に決めればいいんじゃないか？」

「…私も賛成です」

「そうですね。その時に決めましょうか」

勇気達と話をしていると、徐々に通路というか道の果てが見えてくるのが分かった。そしてそこから見える世界がまだ見ぬ『異界』かと思うと、いい年こいて楽しみになって来る。

「行きましょう」

勇気のその言葉を筆頭に、俺達はゆっくりと目指すのだった。

・Episode:9「異界観光ツアー」・（前書き）

短いです。

- Episode : 9 「異界観光ツアー」 -

「もうそろそろですね」

勇気の声と共に、俺達は再確認する。俺達は既に『異界』に入りつつあるという事と、そして目先とまではいかないが、夕暮れの時の赤みが掛かったオレンジ色の光が少しずつ差し込んでおり、今はまだ四角の枠組みとして存在している場所に辿り着いた時が『異界』に入った事になるのだらうと。

「出発したのは夕方より少し前ですから、歩いている間に夕方になったのでしよう」

「大分歩いたしな、さすがに疲れて来る」

愚痴を言いつつ歩を進めると、更に入り込んでくる光に赤みが増していき、俺達は四角の枠組みにも見えた出口へと辿り着いた。そして、そこから見えた世界は。

まず隣にいた途上は一瞬息を呑み、そして呟く。

「…凄い」

いや、確かに俺も思った。というか、これは「凄い」の言葉以外にもどう表現すればいいんだ？

どうやら平均的な地形よりも微弱に高い場所らしいここから見えた世界は、全ての自然が巨大だった。まず草原と呼ばれるような広々とした場所は果てが見えず、その中でぼつりと、たった一軒ではない何十にも立てられた農村がいくつもある。夕日はそのまた向こう

に聳える何十もの連なる山によって今まさに覆い隠されようとし、山の中には頂上から赤い物を吹き上げている物すらあった。そしてそういった山と共にするように、もはや苦笑いしか出ないほどの樹海が広がっている。赤と青色の混じる空は、既に都会で見るよりもたくさん星が見え、ところどころに雲が細く縦に伸びていた。

初めてアフリカの大地を見る人はこんな気分なのかと分かったような気がする。

「これは、予想以上に……」

あまりの巨大さと初めて見る『異界』に圧倒され、言葉を途切れさせる勇氣。余裕が出来たので隣を見てみると、眼を大きく見開いていた。

「凄いわよねえ」

ん？ なんかつい数十分ほど前に聞いた事のあるような、雰囲気やぶち壊しにする人の声が後ろの上の方から聞こえた気がする。

俺は恐る恐る後ろを振り返りつつ見上げると、確かにそこにはさつき別れたはずの、魔王クラさんが出口のだった所に右手で頼杖を付きながら腰を据えていた。

「んふふー、というか私達にとってはこっちが当たり前なんだけどねえ。向こうの世界も向こうの世界なりに素敵だけど」

「……」

「……」

「……あれ、クラさん？」

「あらあらあ、途上さん以外は全然反応してくれないのね。冷たあ

い……」

魔気と瓜二つの体をしながら、見慣れない服装でくすくすと笑うクラさん。もう、この人ならなんでもありじゃないかとすら思えて来るな。

「……で、何の御用でしょうか？」

やけに丁寧な言葉で、尋ねる勇氣。表立った態度では出さないものの、殺意というか負の感情が渦巻いているのが見える。

「んふふふ、別に貴方達に用が合ってここに来たんじゃないわ。ただそろそろ来るかなあって」

「来る？」

「あ、来たわね」

とりあえずクラさんが何を言いたいのかわからなかったもので、俺はクラさんの視線の先を見てみた。……？ 風景に変化はない。

「いや、待て……！？」

よくよく見てみると、俺が眼を凝らしてやっと確認できる程度なのだが、豆粒ほどの何かが徐々に大きくなっているのだ。そして、時間が経つ毎に豆粒ほどだった姿は形を取っていき、次第に輪郭りんかくを現す。

「凄いわねえ、相変わらずその眼。普通の人ならまだ見えないはずよ。気づけた御褒美にキスしてあげたいくらいだわ」

「……遠慮しておきます」

刺すような二つの視線が俺に向けられている気がするが、きつと気のせいに決まっている。

俺は逃げるように、もとい逸れていた意識を再び戻し前方へと集中させた。

輪郭を示していた何かは更に明確な姿を現していき、俺は思わず声に出してしまう。

「なんだありゃ」

最初俺は何かドラゴンか何かがやってくるのだろうか、数少ない知識。といってもアニメや漫画だけだな…。そこから引き出して想像した。が、飛んできたのは想像に反したというよりも、ありえない光景が眼に入ってきたのだ。

少女が、空を走っている。

比喩や例えなんかではない、本当に少女が空中で走っている。まるで少女は水溜りを避けるかのように片足ずつ大きく間隔をあけ、空を踏みしめながらこちらに向かって来ていた。というか空中で人が浮いてるってかなり怖いな、幽霊みたいで。

「あ、あれ…」

「……何ですか、あれ」

ようやく視認出来るようになったのか、気づいた二人が呆気に取られたような声を出す。というかあれが何なのか逆に俺が聞きたい。

空中を走る少女は一定のリズムを取りながら足踏みしている。その上で両腕を左右に広げ、まるで綱渡りをしているかのようにしているが、バランスでも取っているのか？

「いらつしゃーい」

クラさんが空中を今正に走って来ている人物に向かって手を振る。すると、少女は溜息を尽きながら俺達が立っている地面へと降り立った。それに合わせて着地した場所から軽いそよ風のような物が、波をうつかのように吹く。

服装はクラさんと同様に見た事が無い。防寒着に似ているがそれをスマートにしたような感じで、濃い緑色に染められた中に白色のボタンが際立っている。軍帽のように硬そうなイメージのする同じく緑色の帽子からは三つ編みを覗かせており、髪はまるでたわわに実った稲のような小麦色をしていた。背丈は俺達とそう差はなく、眠たいのか半分まで瞼を降ろし、捉え方によつては寝起きのようにも見える。

「ねやすでいなやじとごうどんめたま」

そして、眠たそうな少女は俺達には理解出来ない何かの言葉を喋った。

「は？」

「へ？」

「え？」

「およとこのてつあがとごみのた。ふふふふん」

俺達は理解不能の言葉に再び呆気にとられた声を洩らしたが、ただ一人クラさんは理解出来たらしく、眠たそうな少女と同様に意味不明の言葉を喋る。日本語のようにも聞こえる気がするが、イントネーションというか発音が近い物に俺が勝手に解釈しているだけなの

か？

「ぼかん。としていると、俺達の様子を見たそいつは、やれやれという表情をしながら一息尽いて喋った。」

「しかも、この人達向こうの人達じゃないですか。魔法でわざわざ声を調整するのも大変なんですよ」

「今度は日本語：？　　というか、さっきまで全然違う言葉を使ってたが、日本語話せたのか。」

「違うわよん、魔法を使って言語調整をしたのよ。新崎君たちの世界で言うなら世界共通語の英語にしたような物かしらあ」

「地味に例え悪い……」

「新崎、まともに相手をしていたらキリがないです」

「……某コンニャクみたいやな」

つまり、こつちの世界の言葉を喋っていたけれど。俺達に分かるように魔法を使って日本語に聞こえるようにしたって事か？

「で、私に何の用ですか。わざわざ呼び出したりして、まだ配達全部終わってないんですよ？」

「この子達の案内人をやってくれないかしら。まだこつちに来たばかりで道に迷うと思うのよ」

「嫌です、何で私がそんな面倒な事をしないといけないんですか。第一知らない人ですよ」

少女は明らかな嫌悪感を見せながら、落ちつつある瞳を更に細める。まあ、そうだよな。見知りの人ならともかく、初対面の何も知らない奴と一緒にいると言われてやる訳がない。そう思ったんだが。

「そこにいる新崎君なら、貴方の『アレ』も叶えられると思うけどなあ」

クラさんがニコニコしながら謎めいた発言をすると、ぴくりと少女の眉が微かに動く。

「…、彼がですか」

先程まで興味のなさそうだった瞳が、色を纏^{まと}い俺に向けられた。クラさんは何を言ったんだ？

「因みに隣にいるのは私の孫よん」

「貴方の孫をお供にする程ですか…。いいですよ、興味が沸きました」

「んふ。結構結構」

何やら勝手に交渉が始まっては終わったらしく、俺達は事情を飲み込めないままだった。それを余所に、少女がこちらへと歩いきたかと思うと。

「初めましてですね。たった今先代魔王クラ様に貴方達の案内役を頼まれた、アナザー・パトリックです。パトリと呼んでくださって構いません」

手を差し出して、自己紹介をしてくれた。若干上から目線なのは置いておくべきだろうな。

「新崎真人だ。よろしく」

握手を終えると、続いてパトリは勇気へ手を差し出す。

「朝倉勇気です。望んではいませんが、お祖母さんの孫に当たっています」

続いて、途上の元へと。

「あ、…と、途上藍です」

一通りそれぞれの挨拶が終わると、さっそくパトリが呼びかけるように喋った。

「とりあえず夜になるまでに、近くの村に行きませんか。この遺跡付近は魔物は出ませんけど、泊まる所が合った方がいいんじゃないですか？」

パトリに『遺跡』と呼ばれて俺は初めて気づく、確かに辺りを見渡してみれば、ピラミッドまでとはいかないが、インカ帝国辺りにでも出てきそうな煉瓦で作られた建物だった。というかこの辺りでもしも寝るっていったら野宿って事だよな…。俺は平気だが、女子達はそのうはいかないだろう。

途上のほうを見てみると、少しだけ顔を青ざめてしまっている。野宿をしている想像でもしてしまったのだろうかと踏んだんだが、違った。

「『魔物』って何なん…？」

お、珍しく途上が関西弁を人前で喋った。じゃなくてだ、俺もそれは気になるな。学校の授業では魔物なんて言葉を一切聞いた事も無

いし、習った事も無いぞ。

「すいませんが、夜になるまで結構余裕がないので。話は歩きながらしませんか？」

さすがに途上も野宿は嫌だったらしく、それ以上は喋らず無言で頷く。それにしても、途上も段々人前でも上がらなくなってきたな。

「では、付いて来て下さい」

眠たそうに稲のような三つ編みを揺らすパトリ先導して先へと進み、俺達は続いていくようにして門もとい遺跡を後にした。

1

遺跡を抜けるとすぐに森へと入った。そこは先程までの明るさは嘘かのように暗く深く広い。地面は一切として平坦な場所は無く、常に凹凸としており門を通る時の道よりも酷い。普段というか出来れば入りたくない場所を歩きつつ、辺りが静かになった状態で勇気が呟いた。

「それで、魔物とは何なのでしょう？」

「

「…簡単に言うと、魔力を過剰に取りすぎた動物達の成れの果てですよ。動物達といっても私達も入りますがね」

自虐気味に笑うパトリに、勇氣は顔を深く顰^{しか}めながら。

「魔力の過剰摂取？ 許容値以上に魔力が溜まる事はないはずですが」

「溜まりますよ、許容値が魔力以下だったり、外からの魔力供給によつて越える事が稀にあるんです。外からの魔力供給で例えるなら、私達が普段食べている食べ物つていうのも必ず魔力が含まれているんです。特に土地が豊かな場所であればあるほど魔力は集うから、てことは豊かな土地で出来た食べ物なんかを食べると、自身の中で生産される魔力の量に追加され、許容値以上の魔力を得てしまうんですよ。えーつと一気に説明しましたが、ここまで分かりましたか？」

前半まではなんとか理解できた、後半からはもはや何を言っているのか分からん。それが表情に出ていたのか、俺の顔を見た勇氣が溜息を尽き説明する。

「…つまり、許容値のグラスは満杯まで魔力の水は溜まりますが、ご飯という外から継ぎ足される魔力の水によつて溢れてしまうという事です。分かりますか？」

「ああ、そういう事か。分かった、説明すまん」

勇氣は本当に分かったのですか？ と疑り深い顔をしたものの、追及はしなかった。代わりに再びパトリに質問をする。

「だとしたら、毎日食事をしている私達はもう既に『魔物』になっているのではないですか？」

「いい質問ですね、結論から言うと魔物にはなりません。何故なら魔力が満杯まで溜まる事は殆ど無く、また多少は増えても魔物にはならないからです」

「なら…」

「魔物になるのは、異常な自然による環境下にいる動物達ですよ」

「異常な自然環境下？」

「そうですね。この森の比ではないですよ、もともと巨大かつ広範囲にも及ぶ大規模の森はこの世界にはたくさんあります。森だけではないんですが…、まあそれは置いておいて。そこから齎されたくさんの魔力が詰った食料を食べることによって、魔物はどんどん生み出されていきます。ですから魔物は消えません」

「…あ、あのっ」

今まで無言だった途上が、若干遠慮がちに話に割り込みつつ混ざった。

「どうしたんですか？」

「魔物の容姿って…」

「それですか。魔物は大抵が動物だった頃の原型を留めてない上に、異常に進化したというか」

「それって…、あれみたいなの？」

途上がやや斜め前方を指差す。俺達はずられて先を追いかけるながら木々を眼で追って行くと、…なんか、ぎらぎらと赤い瞳でこちらを品定めするように眺め、下品に舌なめずりしている狼みたいなのがいる。しかも一匹だけではなく、ここから見えるだけで十匹ほどいた。

「わあ、一匹見たら数十匹いると思えという謳い文句のある『ヴァルフ』じゃないですか。運がいいですね」

パトリが嬉々とした表情で言っているが、言葉には感情が込められておらず、もしも込めるなら皮肉だろうか。

「どうみても、肉食だよな…」

俺達を見て舌なめずりするのはよほどの変態か肉食動物さんぐらいだろう。前者なら俺は例え一人になっても戦い続ける。

「私一人なら、空中に逃げてなんのことはないんですけどね…。はあ。貴方達は何の魔法が得意ですか？」

「俺は特に」

「私はある程度なら」

「…使えないです」

「ちょっと待って下さい。……、勇氣さん以外壊滅ですか！？ 仮にでもあの人の知り合いなんですよね！？」

「期待している所悪いが、クラさんが異常なだけだ。俺達は至って普通を教授してる」

「いやいやいや、普通でもこつちの世界では最低限様々な魔法を使えないといけないんですよ！？ ちょっと何を悠長に言っているんですか！？」

「ははは」

「開き直る所ではないですよ！？」

もはや最初に感じた冷めた雰囲気を一変させ激しくツツコミをし始めたパトリに、今度は勇氣が冷めた口調で呟く。

「…貴方達が漫才をやっている内に、ヴァルフに囲まれていますか」「あ」

辺りを見渡してみれば、息を荒げながら今か今かと襲いかかりたそうにしている狼の群れが、円を描くように少し先で囲んでいる。遠くからよくは見えなかったが、狼というよりは犬の体に兎の頭部を取ってつけたような灰色の毛並みを持つ不気味な魔物だった。中央に添えられた二つの赤色の眼をぎよるぎよるつと動かし、剥きだしにされた口からはそこだけ狼っぽい鋭利な歯がたくさん並んでいる。

「逃げるという選択肢はなくなりました。新崎、パトリさん。途上さんを内側で守りつつ戦いましょう」

ちゃき。という金属の鳴る音と共に、勇氣は腰元にある剣を取り出し前で構える。仕方が無い、こうなった以上は俺も戦うしかないか俺も邪魔臭いなと思っていた禍々しい剣を腰元から取り出す。…思った以上に重い。

「来ます!!」

勇氣の掛け声と共に。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

狼もどき共が飛び掛ってきた。

「く、うつ! は、速い!？」

予想外の速さだったのか、勇氣は噛み付かれそうになった。しかし、そこはさすがの勇氣で、咄嗟に体を捻りつつ口から体ごと真っ二つにして返り討ちにする。

「魔法で筋力を強化しているんですよ、こいつらは！！　ここいらでは恐らく一番速いと思います！！」

勇気の質問に、この魔物達の事を詳しく知っているパトリが胸元から小型のナイフを二本取り出し投げる。すると見事に飛びついて来たヴァルフ二匹の眉間にヒットさせた。リアルでナイフを投げる奴なんて初めて見たぞ。

「ひ、ひう！？　あかん、あかん！」

途上はというと、恐怖が臨界点まで達したのか人前であるにも関わらず関西弁を洩らしながら、真ん中で膝を折り頭を抱えている。

「そうだな」

そんな勇気達の様子を見ながら、俺は敵に襲われつつも平然と返り討ちにしていた。

何故なら俺の『眼』はありとあらゆる物が『全て遅く見える』という才能を持っており、それによって敵の攻撃が全て遅く見えるからだ。これは一見すると凄く思えるが、元々の俺のスペックが平均より少し上なだけなので、パワーや魔法や頭脳やその他もろもろなんて物に特化していると絶対に太刀打ちが出来ない。代わりにこういう『スピード』だけに特化している奴なら俺でも太刀打ち出来るけどな。

よって俺は今現在結構他を見れるくらいには余裕を持っていた。といっても慢心出来る程でもないんだよな。

「ガアッ！！」

魔物が飛び込んでくるのが見える。そして、俺はこの直後に動かなければならない。いくら眼はよくても、俺自身の反応も当然この魔物以下に遅い訳なので、すぐさまアクションを起こさなければ身体が間に合わないという、まさに宝の持ち腐れ状態なのだ。

俺は軽く魔法によって筋力を申し訳程度に強化させ、切れ味のよい不気味な剣で斜めに斬る。それを見て隙ありとも思ったのか。もう一匹ヴァルクが噛み付いてこようとしたので、下あごに膝蹴りを入れてやる。

「ぎゅあああうんううう！！」

どんな鳴き声だそれは……。とりあえず怯んでいる所に剣を垂直に突き刺す。一瞬だけ物凄く暴れたが暫くすると大人しくなった。

「はあああああああッ！」

すぐ近くでは勇気が足元に俺の倍以上の骸を横たわせ、今尚襲い掛かってくる数体のヴァルクと戦っている。しかし最初の頃のような危なっかしい戦いではなく、きちんと敵の行動を見切った上で避けては斬っていた。足りなかったのは実戦だけで、こういった死を伴う経験を味わうことによって才能が開花したんだろうな。

「随分…、余裕ですねっ！！」

皮肉気味に俺に話しかけてくるパトリ。その合間にもナイフを投げたは眉間へ完璧に当てている。接近してくるヴァルクには投げるナイフを手に携え、確実に脳天へと突き刺していた。

「眼のお陰で敵が遅く見えるからな」

「違います、よっと！！　そうではなく、私は今まで何人も初々し

冒険家達を見してきましたがあっ！！
初めての反応らしく、ないですねえ！！」

「……とりあえず戦いながら話すのやめたらどうだ。女の子なのにその喋り方はどうかと思うぞ」

「ふふふ、いいですよ。戦うのを止めましょう、終わらせましょう。貴方は私に見合う存在だと分かったのですから!!」

話を聞けよ。と呟こうとすれば、突然パトリが空高く垂直に飛んだかと思うと、飛んだ地点を中心に半端ではない突風が吹き荒れた。当然距離関係なく俺や勇気や途上の身動きは遮られ、あれだけ機敏に動いていた大量の敵達も身を固めた。

「『風でも味わえええええええええええ』……！！！！！」

遙か遠くから声が聞こえると同時に、未だ風に自由を奪われていた狼達の姿が、空気を切り裂く轟音と共に急に立った土煙によつて消える。な、何が起こった？

「ふう」

まるで一仕事したかのように、というか実際したのである。パトリが一息を尽きつつ空から降りてきた。

「では、とりあえず急いでるんで行きましようか」

「お、おう」

「ええ……」

「うん」

一体何が今起こったのか理解出来ないまま、言われるがままに受け答えしてしまう。

「村はもうすぐそこなので、質問があったら宿でお願いします」

またしても眠たそうに瞼を降ろしつつあるパトリの一言によって、俺達は呆けた状態を直すことも無く、聞くことも出来ないまま再び歩き始めたのだった。

・ Episode : 10 「第二プラン・村巡り」 ・

やたらと長く思えた森を抜けると目の前には田んぼが広がっていた。田園を抜けた先には大きな家から小さな家まで様々な建物がぼつりぼつりと建っており、俺達はとりあえずそこを目指すようにして田んぼ道を歩き始める。

田という漢字そのものが良く分かる四角形に区切られた田んぼには、絶対触ると冷たいであろう水が張られており、瑞々しい若芽が植えられていた。

「稲か」

「そうですね。ここらへんの地域は季節によって温かさが劇的に変わりますから、こういった季節に合わせられる食べ物が一般なんですよ」

「……という事は、地域によっては砂漠のような場所もあるのですか？」

「というよりも『精霊』達が住む四大地域が異常なだけなんですけどね」

「……しません質問していいですか」

「どうぞ」

「……精霊って何ですか？」

「あー、そうですね。えっと端的に答えると『精霊』っていうのは先程言った巨大すぎる自然から生まれた存在ですよ。木や森や水なんか全てが魔力を所持しているのは知っていますよね？」

「まあな」

「その自然なんかは一応許容値は存在しているんですけど、魔力を体内で作ってはある程度溜まると空气中に発散してしまうんです。ですからただ一般的な武器なんかは魔力を注ぐ事は不可能なんです

が、それはおいておいて。その後魔力はどうなると思います？」

「空気中に溜まるのでは？」

「合っているといえは合っています、ですが少し違います。あまりにも濃密すぎると、とある存在へと変化するんですよ」

「それが『精霊』か」

「当たりです。ですから精霊達が存在する地域は、何かしらの異常自然環境下なんです。勇氣さんが言ったように砂漠化していたり、極寒だったりと」

「…ついでに魔物もそこから製造されると」

「鋭いですねー」

俺の言葉に何故か自虐的な笑みを洩らすパトリ。待て待て何か地雷でも踏んだのか？

「あ、ぱとりーおねーちゃんだー！」

「パトリーじゃねーか！」

高い声が響いたかと思うと、前から小さな子供が二人走ってくる。子供達の服は民族衣装みたいな物で、まるでモンゴル辺りで見かける厚着のようにも見えるが、暑くないのか。

「パトリって言っていますよね、私。パトリーではないと。しかも貴方達は年上を呼び捨てにしないで下さい」

「だってさー、そっちの方がいいやすいんだよー」

「ねー」

子供相手に真面目に答えるパトリに対して、片方の男の子はにひひと健康的な白い歯を大っぴらに出しながら笑い、もう片方の女の子は男の子に同調するように小さな笑みを見せる。

「こらー！ あんたたち仕事を放り投げてどこいつてんの！」

「おかーさんだ！」

「やべっ、逃げるぞ！」

「うん！！」

突如として子供達よりも後ろから届いた声に、子供達は急いでパトリの元を離れどこか遠くへと駆け出した。子供はいつでもどこでもあんなもんかね…。

入れ替わるようにして現れたのは、子供達と同じように厚着でふくよかな女性。瀬名さんの着ている割烹着を着れば、定食屋の人と言われてもあまり違和感がないかもしれない。そしてその女性はこちらに気づいた直後。

「あら？ パトリじゃないか久しぶりだねえ！」

パトリに近づいて行きハグをした。されたほうであるパトリは若干暑苦しそうとか苦しそうな顔をして「うぐおおお…」とぐぐもった声を出している。

「は、…な、し…て…」

「あ、ごめんごめん。私っただら思いつきり抱きついちゃってねえ」

「はあっ、はあああっ…はあっ。わ、悪気のない殺意ほど恐ろしい物はないんですよ！」

「まあまあ、今度家で奢らせてあげるからそんなに怒らない怒らない。それはさておいて後ろの人達はどなただい？ 同業の方じゃないみたいけど」

「この人達はクラ様に頼まれたんですよ、案内をしるだとか…」

「案内…、てことはこの人達は向こうの人達かい。へえー、へえ、へえ。確かにこっちじゃ見ない身なりをしてるわねえ」

じろじろと俺達の服装を見て感嘆の声を洩らす女性。見られるっていうのも慣れたもんじゃないが、俺以上に途上が顔を逸らしながら真っ赤に熟れさせている。そこまで人の目に晒される事に慣れていないのか。

「そういえばパトリ、今日は泊まりにくるんでしょう？ それならさっきのお詫びと旅の祝杯として宿屋代ぐらいは安くつけておこうかしら」

「宿屋代？」

俺が口を挟むと、パトリは何故か一瞬だけ心底驚いたような顔をして、すぐさま元の眠そうな表情に戻し答えた。

「この人は宿屋を営んでいるんですよ」

「宿屋つていつでも大きくないわよー。しかも大きさのわりには手間暇かかるし、手入れもしつかりしないとイケないしで大変なのよねえ」

はあ。と愚痴り気味に溜息を尽く女性。なんとなく表向きにはフアントジーに思えたが、蓋を開けてみればリアル事情が出てきた。
…フアントジー。

「さてと、私も宿屋の仕事があるし、旦那に話をつけとかないといけないから戻るわ」

そう言い手を振りながら俺達から女性は走りながら去っていった。後姿を見ながらパトリが呟く。

「まあいいです。それよりも早く宿屋で一息尽きましよう。私昨日から寝ないでずっと配達やってたんで、休みたくて仕方が無いんで

すよ」

パトリは「付いて来てください」とだけ言ってすたすたと歩き始めた。昨日の夜から寝ないで魔法を使って走っていたのか…、凄い集中力だな。

魔法というのは全部まとめて『持続的』に行われる物だ、なので魔法を使っている途中で『想像』が切れたり魔力の供給が絶たれたりすると、その瞬間に効果や存在は消える。

つまりパトリがさらつと言った事がどう凄いかというと、飛びながら走っている間は魔力を供給しつつ、一度たりとも想像を欠かす事無かったという事だ。それはトラックを運転しながら、運転以外の事、つまりはゴルフをまるで今自分がしているかのように考え続けるといふ事になる。俺だったら絶対にずっと想像し続けるなんていう事は無理だし、魔力も絶対に持たん。

「…それにしても、本当にここらへんはのどかですね。割りと肥えた土地なんですけど、魔物が少ないなんて珍しい」

パトリが言葉に哀愁を漂わせ、感慨深そうに呟く。

辺りには夕日を反射する水が張られた田園があり、遠くの方では麦藁帽らしき物を被った軽装の男性が、同じような田園に入っていたりしている。俺達の歩く田んぼ道は舗装なんてものは当然されておらず、砂利や雑草が混じっていた。少し道から外れて見ればすぐに森への直行コースへと入るほど、村の管理は徹底していない。つまりの所、全てが田舎臭い。ただそれ以上に都会の汚れきった空気とは、真反対のようにこちらは澄んでいて、物事全てに手間暇が掛かるけれど、逆にそれはそれで味があるかのように、田舎なりの良さを感じた。

まるでここは全ての世界から隔離されており、揉め事や争い事が無い平和な場所。そうすら思わせられる。

「子供の頃を思い出しますね…、新崎」

「……」

懐かしい…、か。

俺は幼稚園に入る頃に勇魔と共に魔法学校では幼等部へ入学していた。当時の小さな頃の俺にはダンジョンにも思えた、広大な魔法学校領地。毎日のように辺りを駆け回り、たくさん遊びに遊びつくした。その頃は俺と勇魔と桜しか入学生はおらず、今では親友の気丈を含めた同級生達とも、初等部からである。まあ、そんなヤンチャな記憶しかないんだが…。

「そつえば新崎君。さっきの人は何を言っていたの？」

途上に話し掛けられ俺の意識は戻る。いかんいかん、つい余計な事を思い出しそうになった。

「…ん？ 待て途上。今何て質問をした？」

「いや、さっきの人は何を言っていたの？ って」

「……は？ いや、普通に日本語喋ってたろ」

「ううん、訳の分からない言葉しか喋ってないよ」

「ああ、それについてですか」

何故か隣を歩いていた途上と俺の間にまるで裂くかのように入り込むパトリ。そして下から俺の顔を覗きこみ見つめながら答える。対して弾かれたようにも見える途上は、少しばかり驚いたような表情をしていた。

「新崎さんって魔法のセンスがあるのかもしれないね」

「どういうことだ？」

「実は私はこの村に来てから、魔法を使って翻訳なんかしてませんよ」

「は？」

「まあ無意識の内に翻訳が出来るようになっていう、訓練の一つをやったつもりだったんですけど……」

「すまん、具体的に分かりやすく三行以内にまとめてくれ」

「つまるところですよ、私が最初に翻訳魔法を使う事によって、『魔法を使って翻訳している』と先入観を抱かせ、知らない言葉があれば無意識の内に魔法を使い、翻訳出来るようにさせるつもりだったんです」

「えーっと……、良く分かん」

「ようするに本人達に勝手に勘違いさせて、無意識に魔法を使わせるって事です」

「お、おう」

「貴方達は見た所、魔法を使う上でどうしても『意識』しないと出来ないんですね？」

「ああ」

「それだと私達が喋る度に意識したり、他の事に集中できなかったりと大変なんですよ」

「だから、こういう無意識の内に出来るような特訓をしたって事か？」

「そうですね。もし魔法が使えなくて翻訳出来なかったら、誤魔化せばいい話ですし」

「……」

待てよ、そうすると途上はここに来てから一切として何を喋ってるのか分からなかったのか。あの腫れ上げたように真っ赤にした顔は、

単に人に慣れていないだけじゃなくて、途上からすれば突然知らない人に舐め回すように見られたのか…。それは確かに顔を赤くする。

「悪かった途上…」

「脈絡も無く謝ってきた！？　うちなんもしてへんよね！？　」

真面目に凹みながら謝ると、突然のシリアスに耐え切れなかったのか途上の精神が言葉として公に吐き出された。

「え？」

「へ？」

「……あ」

思わず洩れたであろう勇氣とパトリの声。そしてその意味と自身の行為に気づいたであろう途上は、かああッ。と傍目から見ていても分かるくらいに、ふるふると震わせながら顔を赤くする。

「……」

「……」

「……」

魔法学校からの知り合いである勇氣は眼を大きく見開きながら途上を見つめ、先程知り合ったばかりのパトリですら口を開いたまま止まっていた。どっちも恐らく印象が崩れたからだろうな。

そんな空気に耐え切れなかったのか、途上が突如として瞳に炎を宿し空気を破るかのように叫ぶ。

「うがーっ！　なんやねん。うちがエセ関西弁喋って悪いんか！？　確かに関西弁じゃないよ！　それどころか原型すら留めてないよ

！」

「逆ギレか…、しかも別にお前のエセ関西弁について驚いてる訳じゃないと思うぞ」

「ほっというーな！ どうせうちなんて引き籠もりで陰気で関西弁っばい上に、喋ってる事なんて殆どその場のノリやもん！」

「その場のノリなのか」

「…あの」

「なんやねん！」

がるるるるる。と今にも噛み付きそうな、女の子の仕草としては少し心配になる勢いで睨みつける途上に、少し萎縮しながら勇気がささやかに述べる。

「…逆ギレの意味が違うと思いますが」

それに対して、今の今まで固まっていたパトリが慣れた感じでツツコミを入れた。

「まさかのそこに反応するんですか！？」

「ええ、言葉の綾は誰かが正さないといけないと思いますので」

「いや話の主題は別にあると思いますよ！？」

「正すべきです」

「話を聞いていない！？」

「無駄だパトリ。こいつは間違った事に対して絶対に正しい事をする奴だ」

「その方向も随分間違ってますよね…」

「そういう奴だからな」

「……あれ、なんかうちいつの間にか放置プレイされてへん！？」

カオスという表現が似合うであろう状況。慣れない土地に知り合っただばかりの案内人という、縮こまるであろうコンボなのに俺達は宿

屋まで楽しく会話を続けたのだった。

1

辿り着いた宿屋は女性が言っていた通り、豪華な物ではなく質素な物だった。けれど宿屋という名に恥じぬぐらいには大きい。どうかこういう村でそんな物があつたら逆に凄いいけどな。茶色の木造建築である宿屋は同じように丁寧に彫られた木彫りのドアが正面にあり、上にはガラス張りの窓がいくつか。それと屋根は三角形に煙突と、どこか童話辺りにでも出てきそうな至って普通の煙突が存在していた。板だけに。

「…なんでやろ、寒い」

もはや隠すことなく関西弁っぽく喋る途上。魔法を使えないはずなんだが、何故か気温は比較的温かいのに寒いと言っている。…お前はどのような能力者だよ。

「さてと、さっそく私が一番乗りで入っていきますよ。休みたいんで」

やたら爺臭く喋り、ドアを開け宿屋に入って行ったパトリ。初めて喋った頃から思っていたがあいつは若い割には達観しているみたいな喋り方をするな。

「私達も入りましょうか」

勇気の言葉を筆頭に勇氣。途上。最後に俺。と宿屋へ入って行った。

「いらっしやい」

入ってすぐに渋い声と共に視界に入ってきたのは、真っ直ぐ先に俺達と同じような設置されたカウンターに居座る男性だった。しかし先に入っていたでろうパトリと話をし始め、直ぐにこちらから意識を逸らした。想像していた物より中は広く、玄関は外と同じように地面のままで、隣には靴を入れる下駄箱らしき棚が設置されており、地面から一段上がって木造の床となっている。しかし大人数というよりは十人程度の人が固まれば狭く感じるだろう。天井にはランプらしきものが取り付けられているが、今現在点けられてないって事は夜になったら点けるんだろうな。

「わぁ……！」

同じく中に入っていた途上が嬉々とした声を上げたかと思うと、足早に靴を脱いで下駄箱に入れて激しく水色の髪を揺らしながらカウンターとは別の所へ向かう。その先には奇妙な猫が一匹。猫っぽい体つきに黄色と茶色の毛並みに可愛らしく伸びた尻尾。ここまで一緒なのだが…、尻尾が、尻尾が二本ある。狐かお前は。

「ふしやああああ」

猫っばいそいつは全身の毛を逆立たせ、お尻を上げて頭部を下げているという威嚇のポーズを途上に取っている。

「ふにゃああああ可愛い可愛い可愛い」

対して途上は何故か目を輝かせながら、猫らしきものを前かがみで眺めて悶え苦しんでいた。…と、途上？ キアラが崩壊してるぞ。

「新崎。宿屋の御主人が呼んでますよ」

「あ、ああ。すまん」

思わず途上の方に意識が行っていたせいで、玄関で立ったまま硬直しているという謎の構図が出来てしまった。いかんいかん。

俺は靴を下駄箱に入ると、途上以外が立つカウンターへと向かう。そこには最初に声だけを掛けてきた男性がこちらを見据えながら座っていた。服装は相変わらず温かいのに厚着で、男性の目付きは柔らかく、物腰や雰囲気から優しい人なのだろうという印象を受ける。

「初めまして、家内から話は聞いているよ」

「初めまして、新崎です」

手を差し出してきたのでこちらも差し出し握る。握った手は温かく、それでいて力こそないものの一種の逞しさを感じた。

しかし一旦手を離すと優しそうな雰囲気は雰囲気なのだが、業務用の笑顔へと切り替わる。

「お部屋はすぐ左の扉の先にある階段を昇り、二階のすぐ右側二つの部屋と左側の二つ部屋の計四つですね」

男性は部屋の右側を手のひらで示したのでつられて見てみると、右

側の壁に扉が設置されていた。この先に階段があるのだろう。

「こちらがその四つの部屋に対応したそれぞれの鍵です」

ちやり。とこちらから見ると死角に当たるカウンターの内部から男性は鍵を取り出し、俺の前に差し出してくれる。銀色で微弱だがそれぞれの先端の形が違う。

「食事に関しては夜と朝のコースで、右の扉の先にある食事処で準備させて貰います」

左を同じように指し示したので、またその方向を見てみれば扉が一つ存在している。少し左側には楽しそうに、抱えた荷物に乗っかっているウェーブのかかった髪を揺らす少女の後姿が見えた。

「以上で説明を終えさせて頂きます」

「いえ、ありがとうございます。助かりました」

ぺこりとお辞儀をする男性の真摯な態度に、俺は若干負い目を感じられずにはいられない。たかが一般人が宿に泊まるだけで、そこまでして貰う必要もない気がするぞ…。

俺は借りた鍵をまずパトリと勇気に渡し、次に夢中になって周りが見えていない途上に鍵を渡す。

「さーてさて。私はさっさと部屋でぼっこり爆睡させて頂きますか」

パトリが擬音語としてどうかと思う言葉を喋り、颯爽と扉を開けて奥へと消えていった。

「荷物を部屋に置いてきます。お先に」

「おう」

勇気も続けて部屋へと向かう。

「…次は途上か」

といっても途上は未だよく続くと思う威嚇をしている猫を眺めては嬉しそうに騒いでいる。どうにも話し掛け辛いが、ここで一人にして置いて行くにも気が引けた。…というより置いていたら「あ、あれ！？ みんなどこいったん！？」と後々気づき、カウンター
の男性に聞いても言葉は分からず、往生して最終的には再度聞くと
いう悪循環になるのが目に見えているしな。

「『猫又』っていうんです」

ニコニコと柔和な笑みを浮かべて、カウンターに頬杖をつきながら
俺に話しかけてくる男性。仕事が終わって暇になったのか？

「猫の名前がですか、それとも種族名ですか？」

「もちろん種族名ですよ」

「…名前の方は？」

「ミントです、可愛らしい猫又でしょう？」

「可愛らしい猫又といわれましても、猫又自体初めて見ましたが」

まあ、猫として考えたら普通に愛くるしいのだろう。尻尾は二つあるけどな。

「…猫又っていうんですか」

いつの間にか話に混じっていた途上が、先程までのハイテンション

とは打って変わって、人前の時の正に猫被った状態となっている。といっても男性の言葉は分からないんだろうが。

「ミントっていうらしいぞ、その猫又」

「ミント…」

「まあその話はいいんだ。途上も早く自分の部屋に行って荷物を置いて来い」

「…え？」

やっぱり話を聞いてなかったか…。俺は溜息を尽きつつ途上に説明をすると、途上はこくりと頷いて部屋の方へと向かった。その背中はやけに物静かだったが、少し遊べないという事が分かってテンションが下がっているのかもしれない。

「では、俺も荷物を置きに行ってきます」

男性に軽く礼をしつつ、俺も部屋へと向かう事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903x/>

幼馴染みは勇者と魔王の娘。

2011年12月25日19時56分発行